



農業保險論

第壹篇

中

1006



第一篇 保險原論



總論 三條

ヤ否ノ下問ニ對シ的切ノ答辯ヲナサニハ先ツ
農民ノ状態ハ保險法ニ由リテ改良スルヲ得ヘキ
性質ヲ有スルヤノ二要点ヲ明ニセサルヘカヲ込
今日本農民ノ状態ヲ察スルニ法律及一般事情ノ
如何ニ關係スルモノ、外主トシテ左ノ諸件ニ關
係スルモノナリ

- 第一 農民ノ資産
- 第二 同收穫

大正十一年四月
隈侯爵郵寄贈

- 第三 收穫物ノ相場
- 第四 自用收穫物ノ高
- 第五 農民ノ納稅額
- 第六 同負債
- 第七 金融

然シテ其關係スル所ノ一般事情及法律ヲ舉クレハ運搬賃、穀類輸入ヨリ起ル所ノ競争、農産物輸出ノ多少、農業學校、遺産相續法、抵當法、訴訟法等ニシテ此等ハ都テ農民ノ状態ニ多少ノ關係ヲ有セサルハナシ

然リト雖モ此等ノ諸件ハ爰ニ一々辯明スルヲ要セズ唯最モ前記ノ下問ニ密接ノ關係アル要點ノ

ミヲ説示スヘシ抑モ抵當法ハ本案ト最モ密接ノ關係ヲ有シ而シテ其改正ハ實ニ欠ク可ラサル所ナルカ故ニ之ヲ詳論セサルヘカテスト雖モ今之ヲ詳論セントスルトキハ別ニ立案ヲ要シ且ツ今日ニ在リテハ現行ノ抵當法ニテ(少シク改正ヲ加フルヲ要ス)尚ホ可ナリト信スルヲ以テ本論ニ於テハ敢テ抵當法ノ事ニ論及セサルヘシ

農民ノ資産及收穫(前記第一及第二)ハ農業保險法ニ於テ保險スヘキ物件ナリ故ニ農民ノ資産、收穫及其危害ヲ第一章ニ記述シ第二章ニハ保險法殊ニ農業保險法ヲ説クヘシ而シテ農業保險法ヲ説クニ於テハ株式保險會社、相互保險會社又ハ官立

保險會社、可否等都テ外形上ノ事ヲ辯論スルハ、
極メテ無用ナリト信スルヲ以テ姑ク之ヲ省キ單
ニ各縣ノ自治体ト被保險者トヲ以テ組織經理ス
ル所ノ相互保險法ノ事ヲ論セントス
家畜保險及家屋保險ハ農業保險ノ一部分ニシテ
誠ニ緊要ノ事ナリト雖モ歐洲ニ於テ灼然タル實
例アリテ其法既ニ明瞭ナルヲ以テ唯簡短ニ之ヲ
説示スヘシ獨リ收穫保險ニ至リテハ本案ノ大眼
目ニシテ歐洲ニ於テモ之ヲ實行セサルニ非スト
雖モ唯一種ノ災害ヲ保險スルニ止マル電害保險
法アルノミヲ以テ爰ニ之ヲ詳論セサルヘカラス故
ニ第二章第三項ハ保險ヲナサ、ル損害及賠償ヲ

ナサ、ル一分損害ト題シ專ラ收穫保險法並ニ收
穫物ノ相場、自用收穫物ノ高及納稅義務(前記第三
第四及第五)ト收穫保險法トノ關係ヲ示サンカ爲
メ更ニ左ノ三款ニ分テ之ヲ細述スヘシ

(第一) 步割辨償法ヲ設ケ被保險者ノ自ラ損害
ヲ致スノ弊ヲ豫防スルコト

(第二) 收穫物相場ノ保險法ニ及ホス所ノ影響
及保險法其宜ヲ得サレハ外見上ノ損害
ヲ償フニ至ルノ弊

(第三) 凶荒ノ年ニ於テ收穫物相場、自用收穫物
ノ高及納稅義務ノ農民狀態ニ及ホス所
ノ影響及凶荒保險ノ程限

又天災及農業保險ト農民ノ負債(前記第六)及金融(前記第七)トノ關係ハ簡短ニ第三章ニ記述スヘシ而シテ第四章ニハ本篇第三章マテニ見エタル保險法ノ缺點ハ保護法ヲ設ケテ農民ヲ救済スヘキ所以ヲ論セン

第一章 農民ノ資産、收穫及其危害

第一項 農民ノ資産及其危害

第十四條

農民ノ重要ナル資産中ニ算入スヘキモノ左ノ如シ

- (イ) 土地
- (ロ) 建物

(ハ) 家畜

(ニ) 貯藏シタル收穫物及種子

(ホ) 農具

(ヘ) 未收穫ノ穀類

(備考)但シ(ヘ)未收穫ノ穀類ハ姑ク他ノ諸件ト區別シ資産外トシテ之ヲ論ス

農民ノ資産(家畜ヲ除ク)ニ及ホス所ノ災害ハ其收穫ヲ損スル所ノ災害ニ比スレハ其至ルコト極メテ稀ナリト雖モ若シ此災害ニ遭逢スルアラハ其困難ヲ感スルノ深キコト收穫ノ害ト同日ノ比ニ非ス或ハ收穫ノ淵源タル土地ヲ失フニ至ルコト

ナシトセス例ハ激流觸突ノ爲ニハ汰土ヲ墮壞
セラレ火山噴裂ノ爲ニハ良田ヲ融化物及火山灰
ノ中ニ埋没セラレ又洪水及海嘯ノ爲ニハ時トシ
テ住宅倉庫及厩舎等ヲ一掃シ去ラレ火災及震災
ノ爲ニハ又之ヲ焚燒破壞セラレ疾疫ノ爲ニハ畜
類ヲ斃サレ且ツ家屋ニシテ災害ニ罹ルトキハ併
セテ種子及自用食料其他販賣ニ充ツヘキ穀類ヲ
失ヒ並ニ耕作必要ノ器具ヲモ亡フニ至ルヘシ又
戰亂一揆ノ爲ニハ建物家畜貯藏品及家具農具等
ヲ舉ケテ全ク破壞セラレ、コトモアルヘシ

第二項 農民ノ收穫及其危害

第十五條

收穫物ノ良否及其數量ノ多寡ハ左ノ二件ニ關ス
ルモノトス

第一 人為

第二 天為

而シテ人為(甲)ノ作用ニニアリ即チ農夫自ラ爲ス
モノ(甲イ)ト他ヨリ致サル、モノ(甲ロ)ト是レナリ
又天為(乙)ノ作用ニニアリ即チ慢性的天災(乙イ)及
急性的天災(乙ロ)是レナリ

第十六條

(甲イ)左ニ掲クルモノ、如キハ農夫自ラ爲ス所ニ
シテ其收穫物ノ粗惡及減少ヲ致スノ原因トナル
モノトス

肥料ヲ施スコト充分ナラス又ハ適當セス若クハ
田圃ノ耕耨種藝ニ盡カセサルノ類ニシテ例ヘハ
耕地ヲ深鑿シ土塊ヲ破碎シ及耕土ヲ輕鬆ニシ若
クハ之ヲ踐壓シ雜草ヲ耘鋤スル等ノ事ヲ怠リ或
ハ培養ノ方法下種ノ多少又ハ種子ノ撰擇ヲ誤リ
用水ノ灌溉ヲ慢ニシ若クハ作物更種ノ年季ヲ錯
リ又ハ下種ノ季節ヲ失フカ如キ是レナリ
凡ソ農民ノ業務ハ其耕作物ノ種類ニ隨ヒテ各其
方法ヲ異ニスルモノニシテ米麻馬鈴薯及木棉ノ
如キ皆然リ故ニ日本ニ於テ現ニ耕作スル所ノ種
類ハ穀類、菜蔬類、芋薯類、藥草等凡ソ百種アルヲ以
テ其耕作ノ方法モ亦凡ソ百種ナルヘキノ理ナリ

然レトモ今實際ニ就テ之ヲ察スレハ唯ニ此ニ止
マラサルモノアリ何トナレハ此各種植物ハ地質
又ハ地勢ノ高低等ニ隨ヒテ大ニ其耕作方法ヲ異
ニセサルヘカウサレハナリ
耕作方法ノ多般ナル既ニ是ノ如シ而シテ農民勤
勉ノ功ハ其收穫ニ關係アルコト之ヲ天爲ノ力ニ
比スレハ殆ト其過半ニ居ルモノトス然レトモ此
多般ノ方法ニ就キテ一々之ヲ監督勤査シ農夫ヲ
シテ適當ノ季節ヲ失ハス充分ノ勤勞ヲ吝マス又
其方法手當ヲ誤ラサシムルハ到底爲シ得ヘキ
所ニ非ス若強テ之ヲ爲サントセハ每農夫每田圃
ニ監督官吏ヲ置キ毎時ニ之ヲ指揮スルコト猶農

民自己ノ良心其身ヲ督責シテ能之ヲ勤動セシムルカ如クセザルヘカラス是レ豈至難ノ事ニ非スヤ假令之ヲ爲シ得ルモノトスルモ其干涉ノ弊タル農民ヲシテ責任ヲ盡スノ心ヲ薄クシ又勤勉ニ由リテ良質多量ノ收穫物ヲ獲ント欲スルノ思念ヲ減セシムルニ至リ其害將ニ言フニ勝エサルモノアラントス夫レ既ニ農民ノ勤惰ヲ監督スルノ道ナキトキハ保險會社ヲシテ下種方法ノ宜シキヲ得サルニ原因スル收穫ノ減少ヲモ賠償セシムルコトナキヲ必スヘカラス果シテ然ラハ此會社ノ設立ハ之ヲ一國ノ不幸ト謂ハサルヲ得サルナリ

第十七條

(甲) 收穫ノ多少良否ハ農民自ラ爲スモノ、外尚ホ他ヨリ致サル・モノアリ例ヘハ收穫保險ノ方法其宜ヲ得サルカ又ハ耕作ニ關係アル政府ノ規則其當ヲ得サルカ如キハ收穫ニ大關係ヲ有スルモノトス即チ政府適當ノ時ヲ以テ河心ノ淤塞ヲ浚濬シ又ハ堤防ノ破損ヲ修理セサルカ若クハ森林ノ保護ヲ怠リテ其濫伐ヲ禁セサルトキハ旱魃水害交々臻リ農民ヲシテ非常ノ損害ニ罹ラシムルニ至ルヲ免レサルナリ又戰亂一揆ハ時トシテ耕作ヲ害シ又ハ收穫物ヲ損フモノトス然ルニ其事變タル全國一般ニ關シ

テ而シテ其損害ハ唯其地方農民ノ負擔ニ歸スル
ノ恐アルモノナリ

第十八條

今茲ニ收穫上ニ關係アル天災ヲ列舉スレハ旱魃
雨濕氣候不順寒冷連陰ヲ慢性的天災(乙イ)トシ
海嘯洪水暴風雨降雹暴寒地震火山噴裂雨灰山崩
蟲害ヲ急性的天災(乙ロ)トス又植物病ヲ以テ第
三ノ災害トナス

第十九條

(乙イ)右慢性的天災ハ往々廣遠ノ區域ニ連亘スル
ノ性質ヲ有スルモノニシテ之ヲ日本饑饉ノ歴史
ニ徵スルニ其旱魃氣候不順又ハ雨濕及寒冷等ノ

動モスレハ一時ニ全國ニ延及セシ實例アリ而シ
テ地方ニ由リ或ハ全ク其害ニ罹ラサルコトアリ
或ハ殆ト無事ト稱シテ可ナルコトアリト雖モ要
スルニ其害ノ及フ所ハ全國ノ大部ニ涉リ或ハ數
州ニ跨ルヲ常トス

收穫歉少モ亦彼ノ餓莩途ニ横ハル所ノ慘酷ナル
凶荒ト其原因ヲ同クスル者ナリ而シテ此場合ハ
頻次之アル所ニシテ彼ノ凶荒ノ如ク罕レニ襲
來スルモノニ非ス然レトモ此收穫歉少ノ年ニ於
テ氣候ニ起因スル障害ハ農民タル者能ク其力ヲ
盡ストキハ亦以テ之ヲ防遏スルコトヲ得ヘシ旱魃
ノ如キハ平常使用スル溝渠ニ於テ水量ノ減少ス

ルモ尚ホ水車ヲ用キテ深所ノ水ヲ引キ又ハ井水
ヲ汲取シテ以テ灌漑ニ供シ或ハ建薦及ヒ藁類ヲ
以テ作物ヲ蔽ヒ日熱ノ射照ヲ障ヘハ則チ其乾燥
ヲ禦クヲ得ン又雨濕ヲ禦クハ殊ニ容易ナラスト
雖モ其收穫ニ損害ヲ被ハル所ノ卑濕ノ土地ニ在
リテハ溝渠ヲ通シ又ハ水濕ヲ除クノ方法ヲ用ウ
レハ則チ其害ヲ防クヲ得ン此除水器ハ歐洲ニ於
テ之ヲ農業上ニ用キ現ニ其效益ヲ收ムルモノタ
リ日本ニ於テモ北海道又ハ陸羽地方ニ在リテハ
之ヲ使用スルゴト蓋シ多カルヘシ之ヲ要スルニ
氣候ニ起因スル患害ハ其度愈弱ケレハ防禦ノ效
愈大ナル者トス

所謂凶年ナルモノハ余曩ニ東洋協會ニ於テ日本
饑饉ト題シ演説シタリシ如ク其禍害ノ來ルヤ唯
ニ一年ニ止マラヌシテ往々比年連リニ臻ルノ性
質ヲ特有スルモノトス而シテ豊年及平年ナルモ
ノモ亦此數年ニ彌ルノ性質ヲ有スルナリ
凶年ハ又一種特殊ノ性質ヲ有セリ即チ一地方ニ
於テ一種若シクハ二三種ノ作物歉少ナルモ他種
ノ作物ハ之ニ反シテ豐穰ナルコト是レナリ蓋農
業ナルモノハ其地ノ平均氣候ニ適應スル所ノ作
物ヲ選ミテ耕作スルヲ以テ定法トス而シテ作物
ハ固ヨリ一種ニ止マラサルヲ以テ其氣候ニ感ス
ルノ利害ハ各種之ヲ其ニスルモノニ非サレハナ

リ然ラハ則チ凶年トハ何ノ謂ソヤ其氣候ノ平均
ヲ失ヘル年ヲ謂フノミ故ニ例ヘハ氣候其平ヲ失
ヒ暑熱不足ナルトキハ甲種ノ作物ニ利ニシテ乙
種ニ害ナル者アリ即チ穀類ト芋薯類トノ如キ其
氣候ニ感スル全ク相反スルモノナリ此ニ由リテ
之ヲ察スルニ農業上凶年ニ際シテ能ク安全ヲ得
ルノ良策ハ其作物ノ種類ヲ多クスルニ在リ是ノ
如クスレハ則チ甲ノ果穀ニ於テ損シタル所ハ乙ノ
果穀ニ於テ之ヲ償フヲ得ヘキナリ

(備考)此策タル決シテ新創ノ説ニ非ス現ニ日本
ニ於テハ嘗テ之ヲ實行セシコトアリ蓋シ日本
ニ於テ漸次ニ作物ノ種類ヲ増加シタルハ疑ナ

キノ事實トス是レ此百年間日本饑饉ノ度数ノ
前百年間ニ比シテ甚々寡少ナルヲ以テ之ヲ知
ルヘシ殊ニ養老三年及六年(紀元後七百十九年
及七百二十二年)及弘仁元年及十年(八百十年及
十九年)ニ於テ饑饉ノ災害アリタル後元正天皇
及嵯峨天皇ハ米穀歉少ノ時ニ際シ他ノ食物ヲ
以テ人民ヲ救助セシコトヲ企圖シ其穀類ノ耕
作ヲ獎勵セラレタリ又大寶二年(七百〇二年)ニ
方リテ大饑饉アリタル後文武天皇牧牛ノ事業
ヲ獎勵セラレタルモ亦右ト同一ノ理由ニ出テ
タルヤ疑ナシ而シテ農民保安ノ道ヲ覺悟シ常
ニ同時ニ夥多ノ穀種ヲ耕作スルニ至レルハ實

三是等獎勵ノ力ニ由ルナリ

第二十條

(乙) 上文ニ列舉スル所ノ急性的天災ハ急劇襲來スルヲ以テ各人ノ決シテ豫防シ得ヘキモノニ非ス而シテ海嘯暴風雨降雹地震又ハ火山噴裂ノ如キ最モ然リトス但暴寒ノ損害ハ之ヲ豫防スルコトヲ得ヘシ例ハ葡萄樹ノ如キ植物ニ在リテハ適當ノ時期ニ及ヒテ藁ヲ以テ之ヲ裹ムカ如キ是レナリ洪水又ハ蟲害ハ各人ノ得テ抗拒スヘキ所ニ非スト雖モ洪水ノ如キ其害ヲ被ムル一團結ニ在リテハ殆ト毎ニ其咎ノ幾分ニ居ラサルヲ得ス又蟲害植物病ハ其中全ク避クヘカラサルノ害毒

ヲ致スモノナキニ非スト雖モ其他ハ早ク着手シテ蠶蟲及「^工」_蠶種ノヲ驅除シ又ハ中央政府或ハ地方廳ヨリ嚴重ニ豫防ノ手當ヲ實行シカメテ他ニ蔓延セシメサレハ或ハ其害ヲ免カル、コトヲ得ン

第二章 保險法

總論

第廿一條

前ニ論述シタル農民ノ資産及收穫ニ及ホス所ノ不幸災害中如何ナルモノヲ保險シ如何ナルモノヲ保險スヘカラサルヤハ保險ノ性質ヲ解説セハ自ラ明瞭ナルヲ得ヘシ而シテ其保險スヘカラサ

ル不幸災害ニ對シテハ別ニ之ヲ救済スルノ方法ヲ設ケサルヘカヲサルナリ
抑モ保險トハ保險者ト被保險者トノ關係ヲ謂フモノニシテ即チ被保險者若シ損害ニ遭逢スルトキハ保險者ヨリ一定ノ金額ヲ被保險者又ハ其相續人ニ賠償スルナリ而シテ此賠償金額ハ保險約定書ヲ以テ定ムルモノアリ(例ヘハ生命保險家畜保險ノ如シ)或ハ無上ノ損害ニ對スル賠償金最高額ヲ豫定シ一部ノ損害ニ對シテハ其損害高ヲ見積リテ賠償額ヲ定ムルモノアリ(火災又ハ電害保險是レナリ)
今保險者ノ種類ヲ舉クレハ則チ左ノ如シ

(イ) 保險者一個人ナルモノアリトリフキ(毛狀蟲害)保險是レナリ但シ此保險法及自己保險法(自己保險法ハ他ヨリ保險ヲ受クルモノニ非ス故ニ純然タル保險ニ非ス)ノ外ハ復一個人ニテ保險スルモノナシ
(ロ) 數名ノ資本家團結シテ保險者タルモノアリ左ノ如シ

(甲) 資本家一時團結シテ保險者タルモノ即チ往時ノ海上保險法是レナリ

(乙) 資本家永久團結シテ保險者タルモノ即チ株式保險會社是レナリ

(ハ) 組合員ヲ以テ被保險者トナスモノ即チ相互

保險法ナルモノアリ左ノ如シ

(甲) 私人團結シテ互ニ保險ヲナスモノ即チ

ゴータノ相互火災保險會社相互生命保

險會社等ノ如シ

(乙) 私人團結シテ互ニ保險ヲナシ經理上政

府又ハ地方廳ノ干涉ヲ受クルモノアリ

即チ左ノ如シ

(イ) 有志保險即チ巴威里國公立電害保險

會社(巴威里國火災保險局中ニ電害保

險部ヲ置キテ會社ノ經理上ニ干與セ

シム)是レナリ

(ろ) 有志保險ニシテ一定ノ場合ニ限り強

制保險ヲナスモノ即チ巴威里國火災

保險會社(巴威里國火災保險局ヲ設ケ

テ會社ノ經理上ニ干與セシム)是レナ

リ

(は) 強制保險即チオーストリアフランス

公立火災保險會社ウイースバーデン

縣火災保險會社ホーヘンブルルン

火災保險會社バーデン國火災保險會

社等是レナリ

(三) 政府自ラ保險者タルモノアリ

右(一)(二)及(三)ノ保險法ハ今之ヲ論述セス而シテ余

ノ本案ニ所謂農業保險トハ則(ハ)ノ相互保險法ヲ

謂フナリ其地方廳ニ於テ該保險組合ノ事務ニ干
與スルコトハ後文ニ於テ之ヲ論セントス
抑モ相互保險ノ性質ハ損害ヲ多數人ニ分擔セシ
ムルニ在リ其方法左ノ如シ

(一) 組合員ヲシテ唯常時ニ於テ損害ヲ分擔セシ
ムル手續即チ毎歲組合員ヨリ保險金ヲ集ム
ルコト

(二) 組合員ヲシテ常時ト事前トニ於テ損害ヲ分
擔セシムル手續即チ毎歲組合員ヨリ保險金
ヲ集メ並ニ準備金ヲ取立ツルコト

(三) 組合員ヲシテ常時及事前事後ニ於テ損害ヲ
分擔セシムル手續即チ毎歲組合員ヨリ保險

金ヲ集メ準備金ヲ取立テ并ニ組合ノ為メ
負債ヲ起スコト

余ハ今本論ニ於テ日本ノ為メニ毎歲保險金ヲ
取集メ準備金ヲ積立テ且ツ負債ヲ起スノ三法
ヲ用ケル所ノ相互農業保險組合設立ノ建議ヲ
ナサントス
而シテ余ハ本章ニ於テ左ノ順序ヲ以テ論説ス
ヘシ

第一項 損害ヲ多數人ニ分擔セシムルハ唯
年々保險金ヲ募ルノ方法ニ依ルコ
ト

第二項 損害ヲ多數人ニ分擔セシメ及數年

第三項

ニ分割スルコト
保險ヲナサ、ル損害及賠償ヲナサ
サル一分損害

第一款

本項ヲ分チテ左ノ三款トス
歩割辨償法ヲ設ケ被保險者ノ自
ラ損害ヲ致スノ弊ヲ豫防スルコ
ト

第二款

收穫物相場ノ保險法ニ及ホス所
ノ影響及保險法其宜ヲ得サレハ
外見上ノ損害ヲ償フニ至ルコト

第三款

凶荒ノ年ニ於テ收穫物相場自用
收穫物ノ高及納稅義務ノ農民狀

態ニ及ホス所ノ影響及凶荒保險
ノ定限

第一項

損害ヲ多數人ニ分擔セシムル
ハ唯年々保險金ヲ募ルノ方法ニ依ル
コト

第二十二條

凡ソ相互保險法ニ於テ現在被保險者ノニニ損
害ヲ分擔セシムルノ法ハ最モ簡單ナル方法ニ
シテ方今ノ地方家畜保險組合ハ此法ヲ用之被
害者ノ爲ニモ亦實ニ便宜ト謂フヘシ然レトモ
其害ヲ被ラサル者ニ在リテハ其數少ナケレハ
隨ヒテ其賠償額ノ重キニ困マサルヲ得ス今假

リニ組合各員ノ保險金額ヲ同一トシ而シテ災
害ヲ被ル者ヲ一名トスレハ組合員十名ナルト
キハ被害者ハ十分ノ一組合員百名ナルトキハ
百分ノ一組合員千名ナルトキハ千分ノ一ナリ
蓋シ組合員衆多ナレハ被害者ノ數隨ヒテ加ハ
リ組合員寡少ナレハ被害者モ亦隨ヒテ減スルノ
理ナリ故ニ組合員極メテ少キトキハ數年ノ後
ニ至リ始メテ一名ノ被害者アルニ至ラン然レ
トモ尚ホ其害ヲ被ラサル者ハ頗ル其負擔ノ重
キヲ感スヘキナリ之ニ反シテ組合員多キトキ
ハ毎年ノ損害額亦甚々多ク隨ヒテ組合員タル
者毎年賠償金ヲ支拂フニ至ルハ固ヨリ論ヲ待

タスト雖モ此賠償金タル之ヲ平等ニ分賦スル
ヲ以テ多額ニ過クルノ憂ナキモノナリ是ニ由
リテ之ヲ觀ルニ相互保險法ナルモノハ組合員
ノ數益多キトキハ其法隨ヒテ愈完全ナルモノ
ナリ
故ニ相互保險法ニ在リテハ被保險者ノ散在ス
ル國王益廣闊ナレハ其法益完美ナリト謂フハ
シ之ニ反シテ被保險者若シ小區域内ニ在ルト
キハ悉ク天災ニ罹リ一人モ之ヲ免レサルコト
往々ニシテ之アリ故ニ夫ノ一縣ノ土地ト雖モ
農業保險ニ於テハ尚ホ以テ狭少トナスナリ假
リニ兵庫縣ニ一人收穫保險會社アリトセシカ

若シ之ヲシテ前年大阪ニ於テ凡ソ十萬許人ヲ不幸ニ陥レタルカ如キ水災ニ對セシメハ必ス非常ノ困難ニ罹リシナラシ又一縣内ニ於テ暴風地震海嘯又ハ蟲害等ノ為ニ損害ヲ被ムル所ノ面積ハ其損害ヲ被ムラサル所ノ面積ニ比スレハ其割合常ニ廣闊ナルカ故ニ縣立保險ハ保險ノ目的ヲ達セサルノミナラス却テ反對ノ結果ヲ見ントス然ルニ今一大會社ヲ設立シテ全國ノ保險ヲ引受ケシムルトモハ金ク之下相反スルモノトス是ヲ以テ英佛獨等歐洲各國ノ生命保險會社火災保險會社電害保險會社等ハ成ルヘク全國ニ其區域ヲ擴張セシコトヲ務メ自

國ニ於テ各所ニ代理店ヲ置クノミナラス更ニ區域ヲ擴メテ外國ニ及ホスモノモ亦尠シトセス現ニ日本ノ開港場ニ於テモ殆ト七十許ノ歐米海上及運送保險會社並ニ生命及火災保險會社ノ代理店アリテ各其業務ニ從事セリ

是ニ由リテ之ヲ觀ルニ今日日本農業保險法ニ於テ第一ノ要件トナスモノハ之ヲ全國ニ普及スルニ在リ而シテ之ヲ普及スルニハ宜ク各府縣ヲシテ保險組合ヲ組織シ其組合相集リテ更ニ全國聯合保險組合ヲ設ケシムヘシ則最モ容易ニ普及スルヲ得ヘキナリ

第二十三條

以上掲ケル所ノ方法ニ由ルトキハ農業保險法ハ
必ス之ヲ數多ノ急性的天災ニ及ホスコトヲ得ヘ
シ何トナレハ其災害ヲ被ラサル府縣アリテ他ノ
罹災府縣ニ在ル被保險者ノ損害ヲ負擔シ得ヘケ
レハナリ

夫レ海嘯洪水ノ全國又ハ國ノ大部分ニ災セシコ
トハ未タ曾テ之アラズ今海嘯ニ浸サルヘキ海岸
及洪水ノ流溢スル沿河ノ低地ヲ以テ全國ノ面積
ニ比スレハ僅ニ其百分ノ一若クハ十分ノ一ニ過
キス又各火山ノ同時ニ噴火スルコトモ亦決
テ之アラズ其融化物及火山灰ノ迸出飛散スルハ
最不幸ノ場合トモ僅ニ二三方里ニ過キサルモ

ノナリ又暴風暴雨及暴寒ノ如キハ其災害ヲ被ム
ルノ土地甚タ廣クシテ全州若クハ數州ニ互ルコ
トアリト雖モ其罹災ノ度各地皆同一ナラス收穫
ヲ舉ケテ烏有ニ歸セシムルノ土地ハ唯其中心ニ
當ル一線路ニ過ケサルカ故ニ其損害ヲ合計スレ
ハ數量ノ夥シキ實ニ驚クニ堪ヘタルモノアルモ
之ヲ全國ノ收穫ニ比スレハ其割合僅々ナルノミ
又地震ノ如キモ時トシテ全國ニ及ホスコトアレト
モ被害ノ慘劇ナル土地ハ實ニ狭小ナルモノトス
今植物病蟲害及畜疫ノ保險ヲナスニ概子一年内
ニ於テ現在組合員ニ其損害ヲ分擔セシムルノ一
法ヲ以テ是レトナスヘシ然リト雖モ此一法ニテ

ハ尚ホ不充分ナル場合ナキニ非ス後條ニ於テ之ヲ説カントス

余ハ上文第十四條ニ於テ戰亂一揆ニ當リテ收穫ヲ損シ家屋ヲ破壊スル人爲ノ禍害ヲ以テ急性的天災ト同視セリ今若シ此人爲ノ禍害ヲ保險スルモノトナサハ何レノ場合ニ於テモ一年限リテ分擔法ヲ以テ充分トナスヤ否ヤ是レモ亦一問題ナリ當ニ後條(第二十六條)ニ於テ之ヲ論スヘシ

第二項 損害ヲ多數人ニ分擔セシメ及數年ニ分割スルコト

第二十四條

今試ニ日本ノ農業上ニ如何ナル大災害アルヘキ

マヲ考フルニ各地共ニ一年內ニ廣大ノ面積ニ及ホシテ巨額ノ損失ヲ被ムヲシムルモノナキヲ保セサルナリ例ヘハ同年內ニ於テ九州ノ牧牛ハ惡疫ノ爲ニ其大半ヲ斃サレ中國畿内ノ農業ハ洪水ノ爲ニ非常ノ損害ヲ被ムリ上野及信濃ニ於テハ火山噴裂シテ土地多ク荒廢ニ歸シ武藏ハ震災ニ遭ヒ陸中ノ海濱ハ海嘯ノ害ヲ受ケ且ツ山陰道ニハ虫害ノ慘狀ヲ見ル等ノコトアラシク然ラハ之カ爲ニ被ムル所ノ損害ハ四千萬圓ノ巨額ニ昇リ全國ノ地租ト匹敵スルヤモ亦未タ知ルヘカヲス若シ他地方被保險者ノ直接ニ其損害ヲ感セサル者ヲシテ之ヲ一時ニ負擔セシメントスレハ

亦其ニ非常ノ困苦ニ陥ルヘキハ觀易キノ理タリ
 而シテ若シ強テ之ヲ負擔セシムルトキハ則チ地
 租ト同額ノ保險料ヲ出タスニ至ルヘシ然リト雖
 モ此ノ如キ大害ヲ被ムルハ極メテ稀ナルカ故ニ
 其損害ノ高ハ之ヲ數年ニ分割スルヲ得ヘシ然ル
 ヲ尚ホ一年ニ負擔セシムルノ要ヲラシヤ故ニ若
 シ平均廿年毎ニ一回ノ大凶荒アリトセハ其損害
 ノ高ヲ廿年賦トナシテ負擔セシムルヲ得ヘシ
 然ラハ則チ各人ノ經濟上ニ不都合ヲ感セサルヘ
 キナリ

(備考) 四千萬圓ノ元金ヲ六朱利トシ之ヲ二十个
 年賦乃至三十五个年賦ニ分割スルトキハ毎年

元利金償却ノ割合左ノ如シ

二十个年賦	三四八七三八二
二十五个年賦	三一二九〇六九
三十个年賦	二九〇五九五六
三十五个年賦	二七五八九五四

而シテ之ヲ數年ニ分割スルノ方法ニアリ
 其一ハ凶年前數年ノ間常時保險料ノ外更ニ幾
 分ノ金額ヲ取立テ之ヲ準備ニ充ツルノ方法ト
 ス而シテ若シ一朝非常ノ大凶荒アラハ先ツ此
 準備金ヲ支出シ尚ホ不足ナルトキハ保險會社
 ハ負債ヲ募集シテ一時之ヲ支辨シ後チ被保險
 者ヲシテ其償還ヲ負擔セシムヘシ此場合ニ於

テハ左ノ第二法ニ依ラサルハカラス
其ニハ損害ノ一部分ヲ凶年後數年間ニ分割シ
其間被保險者ヲシテ會社負債ノ元利ヲ償還ス
ルニ足ルヘキ多額ノ保險賦金ヲ支拂ハシムル
ノ方法トス但シ此年賦償還金高ハ之ヲ經驗ニ
徴シテ凶年田期迄ニ完済スルニ足ルノ額ニ定
ムヘシ

右準備金積立及負債募集ノ方法ハ亦保險ノ一法
トス而シテ其準備金積立ノ如キハ各種ノ保險會
社皆之ヲ設ケサルハナシト雖モ負債募集ノ方法
ニ至リテハ之ヲ用ウルモノ甚タ多カラサルナリ
現ニ株式保險會社ハ有限責任會社ナルヲ以テ其

株主タルモノ損失負擔ノ額ヲ限リテ株金額ニ止
メシト欲スルカ故ニ固ヨリ負債募集ノ方法ヲ用
ウルヲ得ス又相互保險會社ニ至リテモ株式保險
會社ヨリ無限ノ競争ヲ試ミラルヘキモノハ之ヲ
實用スルヲ得ス是レ他ナシ若シ負債ヲ起ストキ
ハ後來保險料額ノ増加ヲ要スルヲ以テナリ然レ
トモ萊因河右岸地方ノ巴華里國相互火災保險會
社ノ如キ政府ノ監督ヲ受ケ他ノ競争ヲ受ルノ恐
レヲキ會社ニ在リテハ此方法ヲ設ケタリ(千八百
五十二年五月二十八日發布條例第六十八條及第
六十九條ヲ參看スヘシ)之ヲ要スルニ保險會社ニ
於テ多クハ損害ヲ數年ニ分割スル所ノ負債募集

法ヲ用キテ遠大ノ規模ヲ立ルコトヲ欲セサル所
以ノモノハ蓋シ之ヲ實用スルニ二箇ノ要件アリ
ハナリ請フ次條ニ於テ之ヲ論セシ

第二十五條

凡ソ保險金支拂ノ爲メ負債ヲ起シ及其償還ノ爲
メ年賦金ヲ増徴スル所ノ相互保險組合ニ在リテ
ハ宜シク左ノ方法ヲ用キサルヘカラス

(一)負債償還期限中ハ組合員ヲシテ退去セシメ
サルコト

(二)他ノ收獲保險組合ノ競争ヲ防制スルコト
蓋シ負債ヲ起シタルカ爲ニ保險料ノ増額ヲナス
ニ方リ若シ組合員ノ退去ヲ許ストキハ他ノ組合

員ノ負擔額ハ益々多キヲ加フルカ故ニ各員爭フテ
組合ヲ脱シ其極遂ニ一名モ存留スルモノナキニ
至ラシ果シテ然ラハ利息及元金ハ誰カ之ヲ辨償
セン亦危シト謂フヘシ
又同種類ノ保險組合數多起ルアリテ無限ノ競争
ヲナスコトアラハ新ニ組合員タラント欲スルモ
ノハ皆未タ非常ノ損害ヲ蒙ムラサル新保險組合
ニ入り從來ノ組合ハ漸ク衰類スルニ至ラシ而シ
テ若シ新保險組合一朝大損害ニ遭逢スルアラハ
亦忽ニシテ組合員ヲ失ヒ他ノ組合更ニ起リ其興
廢終ニ絶ユルコトナカルヘシ果シテ然ラハ民力
忽チ衰耗シ且ツ保險法ハ其效ヲ奏スル能ハサル

ヘシ是實ニ競争ノ弊害ナリ然レトモ競争ニハ亦
必ス利益ノ相伴フモノナリ
夫レ競争ニハ既ニ利益ノ相伴フアリ強テ相互保
險組合ノ新設ヲ禁スヘカラス宜シク弊害ヲ防キ
テ以テ之ヲ許スヘシ何ヲカ弊害ヲ防クト謂フ請
フ試ニ一例ヲ舉ケテ其方法ヲ述ヘン
今茲ニ經理上縣廳ノ干與ヲ受クル縣立保險組合
及全國聯合保險組合ナルモノアリトセン而シテ
其縣立保險組合ニ於テ不幸ノ年ニ遭逢シ爲ニ負
債ヲ起シタルトキハ其組合員タルモノ必ス數年
ノ間平年ヨリ多額ナル賦金ヲ出サ、ルヘカラス
然ルニ此時ニ方リ私立保險組合ヲ設立スルモノ

アウハ政府ハ其設立ヲ許可スルノ際現ニ縣立組
合ニ於テ取立ツル所ノ賦金ト同額ナル賦金ヲ取
立テシメ若シ其賦金ヲ使用スヘキ所要ナキトキ
ハ之ヲ準備金ニ繰込マシムヘシ果シテ此ノ如ク
ナルトキハ弊害ヲ防キテ單ニ利便ヲ收メ而シテ
又縣立保險組合ヲシテ保險權ヲ專有セシムルノ
弊ナキニ至ラン

第廿六條

準備金積立法及負債募集法ヲ設ケテ損害ヲ數年
ニ分割スルトキハ戰亂一揆ニ因リテ生スル損害
ト雖モ之ヲ保險スルヲ得ヘク且ツ毎歲賦金取立
ノ一法ニテハ保險スル能ハスト論シタル所ノ急

性的天災モ亦之ヲ保險スルヲ得ヘシ
抑モ戰亂一揆ノ爲メ損害ヲ被ムル所ハ非常ニ廣
濶ナルコトアルヘシト雖モ日本全國ノ耕地四百
萬町歩ノ十分一又ハ家屋七百萬戸ノ十分一ヲ過
クルコトハ殆ト有ラサル所ナラシ之ヲ支那ノ歷
史ニ求ムルニ該國ニ在リテハ近世長髮賊ノ亂ノ
如キ非常ノ禍害ヲ被ムラシムルコトアリト雖モ
日本ノ歴史ニ於テハ未タ嘗テ之ニ類スルモノア
ルヲ見サルナリ夫レ日本人民ノ協和一致ナル此
ノ如キ慘怛タル大内亂無カルヘク且ツ其國環海
ノ一島ナルヲ以テ無數ノ外寇ニ侵入セラレ、コ
トモ亦無カルヘシ夫ノ明治十年西南ノ亂ニ當リ

テハ家屋ノ損害ヲ被ムリシモノ頗ル多カリシト
雖モ此損害ノ如キハ余ノ曾テ(千八百七十八年)日
本家屋一般保險論ニ於テ論シタル戰時ノ損害ヲ
以テ一般保險スヘキ損害中ニ加フルノ説ニ對シ
テ之ヲ擊破スルノ力ナカルヘキナリ
又急性的天災中蟲害ノ如キハ其保險組合ニ於テ
必ス前ニ掲クル三方法ヲ要スヘキモノトス
今日本ノ歴史ニ徵スルニ惜イカナ日本ノ米穀ハ
往々蝗害ヲ被ムルモノニシテ其被害ノ土地甚々
廣キコトアリ享保十八年(千七百三十三年)ノ如キ
蝗蟲ノ害西國ニ起リ西海山陽及山陰ノ三道ニ蔓
延シ餓莩ノ數十六萬人ニ及ヘリ又寶曆六年(千七

百五十六年(一)に至リテ西國再々蝗害ニ罹リ其饑饉ノ狀前次ニ亞ケリ此ノ如キ場合ニ於テ獨リ賦金ヲ募リテ損害ヲ多數人ニ分擔セシムルノ方法ノミヲ用キ準備金積立法及負債募集法ヲ用キサルトキハ到底保險ノ效ヲ奏スル能ハサルヘシ植物病ノ害タル亦虫害ト同一トス而シテ虫害ヲ以テ植物病ト見做スゴトモ亦少ナシトセス夫ノレプラウスノ如キハ一種ノ動物ナルモ或ハ之ヲレプラウス病ト謂ヒ其專ラ葡萄樹ヲ害スルヲ以テ之ヲ葡萄樹ノレプラウス病ト名ケリ而シテ植物病モ其害ノ及フ所甚ク廣キモノアリ愛蘭土國ニ於テ曾テ馬鈴薯ニ一種ノ病ヲ生シ其人民爲ニ

饑饉ニ陥リタルカ如キ是レ以テ證トスヘシ

第二十七條

抑モ相互保險ナルモノハ被保險者愈々衆ケレハ其効力愈々多キモノナリ夫ノ一種又ハ數種ノ植物ニ對シテ保險法ヲ施行スルト之ヲ凡百ノ植物ニ於テスルトノ利害得失ノ如キハ此原則ニ照セハ則チ判然タルヲ得ヘシ請フ左ニ之ヲ論セン
夫レ植物病ハ全國ニ蔓延スルコトアリト雖モ其病害ニ罹ルモノハ必ス百中ノ一種ニシテ他ノ九十九種ノ作物ハ皆其害ヲ免ルモノナリ然ルニ今一種若クハ數種ノ作物ヲ保險シ不幸ニシテ其一種若シ病害ニ罹ラハ被保險者ノ損害ヲ補償セ

シカ爲ニ募ル所ノ金圓ハ非常ノ巨額ニ昇ラント
ス之ニ反シテ^レ百ノ果穀ヲ保險スルコト、セハ
假令ニ植物病ノ爲メ損害ヲ蒙ムル果穀アルモ之
ヲ他ノ被保險植物ニ比スレハ僅ニ其一小部分ニ
過キスシテ且ツ其損害ヲ分擔シ得ル被保險者ノ
數モ亦甚ク多ナルヘキナリ
蟲害モ亦之ト異ナラス^レプラウ^スハ專ラ葡萄樹
ヲ害シ^レコロネ^ド甲蟲ハ專ラ馬鈴薯ヲ害シ又各
種ノ蠅蟲ハ各專ラ一種ノ甘藍ヲ害スルニ過キス
故ニ蟲害保險ニ於テモ亦困難ヲ訴ヘスシテ損害
ヲ分擔セシメンカ爲メニハ其害ヲ被ムラサル果
穀ノ收穫者多數ナラサルヘカラサルナリ

第二十八條

凡ソ植物ナルモノハ前文(第十九條ノ終)ニ於テ既
ニ論シタルカ如ク各種同時ニ歉少又ハ豊穰ナル
モノニ非ス氣候其平ヲ失フカ如キハ此種ノ植物
ヲ害スルモ却テ彼種ノ植物ヲ利スルコトアリ故
ニ此點ヨリ之ヲ觀ルモ亦成ルヘク多數ノ植物ヲ
保險スルノ利アルコト知ルヘキナリ
此他尚ホ實業上ヨリ之ヲ觀ルモ凡百ノ植物ヲ保
險スルヲ便トス蓋シ作物ハ更迭種藝ノ順序アリ
テ常ニ同一ノ果穀ヲ同一ノ田圃ニ種ウルコトヲ
得サルモノナリ故ニ今二三種ノ植物ヲ保險シ其
他ハ保險ヲ許サ、ルトキハ同一田圃ニシテ一又

七ハ保險ヲ脱シ一タヒハ保險ニ入ルコトアラン
果シテ然ラハ保險會社ハ同一田圃ニ對シテ常ニ
經理上ノ手數ヲ煩ハスヘシ然ルニ凡百ノ果穀ヲ
保險スルコト、ナサハ固ヨリ是等ノ手數ヲ煩ハ
カス而シテ一タヒ其田圃ヲ保險セハ則チ常ニ其
田圃ノ價額(即チ地價)ヲ以テ保險料ノ標準トナス
コトヲ得ヘシ若シ二三種ノ果穀ヲ保險スレハ各
種收穫物ノ價額ヲ以テ保險料ノ標準トナサ、ル
ヘカラス保險會社豈ニ其煩勞ニ堪シヤ
是ニ由リテ之ヲ觀レハ凡百ノ果穀ヲ保險スルハ
其法最モ完全ニシテ事宜ニ適シ且ツ簡便ニシテ
煩ナラサルモノトス

第三項 保險ヲナサ、ル損害及賠償ヲアサ
ル一分損害

第一款

步割辨償法ヲ設ケ被保險者ノ自ラ損害ヲ致
スノ弊ヲ豫防スルコト

第二十九條

凡ソ損害ヲ分擔セシムルニ三法(保險金毎歳取集
準備金積立及負債募集)アリ此三法タル夫ノ慢性
的天災(旱魃雨濕氣候不順、寒冷、連陰)ニ因リテ生ス
ル損害(第十九條ヲ着ルヘシ)ニモ亦之ヲ適用シ得
ルモノナリ今若シ大凶荒アリテ全國ノ半ニ互リ
(全國ニ保險法ヲ施行シタル場合ニ於テ之ヲ言フ)

被保險者被害ノ高五千萬圓ニ及フトセシカ則チ
全國ニ於ケル他ノ一半ノ被保險者ヲシテ此巨額
ハ勿論其半額即チ二千五百萬圓ト雖モ之ヲ一回
ニ取立ツルコトハ到底爲シ能ハサル所ナラン故
ニ是ノ如キ場合ニ當リ一回ニ損害高ヲ負擔セシ
ムルノ方法ハ決シテ其效ヲ奏スル能ハサルモノ
ナリ然ルニ今年々準備金積立ノ法ヲ施シ其金額
大凶荒アルノ日ニ於テ既ニ一千萬圓ニ昇リタル
トセハ其損害ヲ賠償スルニ猶ホ四千萬圓ノ不足
アルモ此金額ハ六朱利ノ負債ヲ起シ償還期限ヲ
二十五年トナシテ之ヲ募ルトキハ一年間ニ支拂
フヘキ元利償還高ハ三百十二萬九千六十九圓ト

ス之ニ毎年ノ負擔額ヲ加ヘテ取立ツルコトハ決
シテ爲シ難キニ非サルナリ
是ニ由リテ之ヲ觀ルニ慢性的天災ノ保險ト雖モ
損害金支拂ノ一點ニ至リテハ亦之ヲ實行シ得ヘ
キカ如シ然リト雖モ凡ソ實行シ得ルノ事ハ必シ
モ皆良法ニ非ス必シモ經濟上ノ利益ヲ爲スモノ
ニ非サルナリ故ニ生命ノ被保險者ニシテ自殺シ
火災ノ被保險者ニシテ其家ヲ自燒シ家畜ノ被保
險者ニシテ其家畜ノ飼養ヲ怠リ取扱方ヲ苛酷ト
シ且ツ之ヲ虐使シテ爲ニ死ニ至ラシメ又收穫ノ
被保險者ニシテ懶惰ニ因リテ收穫ノ歉少ヲ致シ
タルトキ其保險金ヲ支拂フカ如キハ決シテ爲シ

能ハサルノ事ニ非ス然リト雖モ是ノ如キ自ラ致シタル損害ニ對シテハ固ヨリ之ヲ辨償スヘカラスナルモノトス

之ヲ要スルニ保險法ノ主義ハ被保險者ノ怠慢又ハ惡意ニ因リテ致シタル損害ヲ保險セサルニ在リ故ニ例ヘハ自己ノ家屋ニ放火スルモノハ相當ノ罰ニ處セラレ且ツ損害辨償ヲ受クルコトナク又自殺者ノ遺族ニハ生命保險金ヲ與ヘサルカ如シ又之ヲ家畜保險會社ノ規則ニ照スニ曰ク各被保險者ハ保險ヲ受ケタル家畜ヲ取扱ヒ並ニ飼養スルニ規律ヲ立テ戒慎注意スルノ義務アリ若シ此義務ヲ盡サ、ルトキハ直ニ其保險ヲ解キ既ニ

拂込ミタル入社金、保險料並ニ會社及其財産ニ對スル各種ノ權理及請求權ヲ失フモノトスト而シテ保險會社ニ於テモ亦犯則ヲ觀察シ且ツ之ヲ聞知スルノ方法ヲ設ケサルヘカラスナリ

今收獲保險ヲシテ此主義ヲ取ラシメハ則チ被保險者ノ怠惰等ニ因リテ收獲ノ高ヲ減シタル場合ニ於テハ總テ其損害ヲ償ハサルヘキナリ論者或ハ曰ン若シ然ラハ收獲保險會社ハ到底成立セサルヘシト然レトモ之ヲ生命保險、火災保險及家畜保險ニ照スニ自殺者、自燒者及自ラ家畜ヲシテ死ニ至ラシメンモノニ保險金ヲ交付セサルモ其保險會社ハ猶ホ成立スルニ非スヤ豈ニ收獲保險會

社ニ至リテ獨リ成立セサルノ理アラシヤ
然リ而シテ被保險者ニ於テ其收穫ニ歎少ヲ來セ
シ所以ハ專ラ慢性的天災ニ起因セリト主張スル
場合ニ在リテ此農夫ノ果シテ能ク誠實勉勵ヲ以
テ農業上各般ノ義務ヲ盡シタルヤ否ヤヲ知ルノ
方法ハ果シテ如何余前ニ農事ノ頗ル多端ナルヲ
以テ之ニ有效ノ監督ヲ施スハ斷シテ決行シ能ハ
サルコトヲ論セリ蓋シ凶荒ハ判然タル年ニ於テ
ハ收穫ニ減少ヲ來セシ所以ノモノ一般ノ早魃雨
濕寒冷等ニ因ルコト知ルヘシト雖モ收穫ノ歎少
ヲ來スヘキ氣候不順ノ年ニ於テハ農民收穫ノ減
少ヲ防クノ業務ヲ爲セシ程度如何ヲ識別スルコ

ト頗ル難シ何トナレハ農夫ノ業務ハ常ニ之ヲ監
督シ其情況ヲ知悉スル能ハサレハナリ然ルニ今
若シ農夫ヲシテ收穫ノ減少ヲ防クヘキ臨時ノ業
務ヲ怠ルモ猶ホ被保險會社ヨリ其損害ヲ償フヘキノ
望アラシメハ恐クハ之ヲ怠ルモノ多カラントス
歐洲ヲ以テ之ヲ例センニ雨濕ノ年ニ際シ下水及
除水器ノ設ナキモ猶ホ損害ヲ受ケサルコト確然
タルトキハ誰カ其設置ニ金錢ヲ費スモノアラン
ヤ
今假リニ被保險會社ヲシテ慢性的天災ニ起因スル
收穫歎少モ亦之ヲ保險セシムルトセハ則チ其歎
少タル全國收穫平均高以下ニシテ未タ凶荒ト

稱スヘカラスル場合ニ於テ其保險金ヲ支拂フモ
人多キニ至ラシテ此損害ハ前文已ニ論セシ
カ如ク專ラ天災ニ起因シタルモノナルヤ否ヤヲ
知ルコト極メテ難カルヘシ故ニ今若シ保險會社
ヲシテ損害ノ起因詳ナラサル場合(此等ノ場合ニ
於テ被保險者ヨリ辨償金ヲ請求スルコト極メテ
多カルヘシ)ニ於テ辨償金ノ支拂方ヲ拒絕セシメ
ハ保險會社ニ於テ其事實ヲ誤認スルニ因ルコト
ナキヲ保スヘカラス若シ其誤認ニ因ルトキハ被
害者タル農民ハ必其拒絕ヲ不當トセン而シテ會
社ハ忽チ農民ノ信用ヲ失ヒテ却テ其厭惡ヲ招キ
竟ニ農民ノ幸福及農業ヲ進歩スルノ用ヲ爲サ、

ルニ至ラシ若シ又會社ヲシテ此ニ反スルノ方畧
ヲ取リ此等ノ場合ニ當リテ皆其損害ヲ辨償セシ
ムハ則チ既ニ前文ニ於テ解説シタルカ如ク遂ニ
農民ヲシテ勉勵ヲ沮シ注意ヲ忽ニスルニ至ラシ
メ其心竊ニ謂ヘラク我輩今收穫ニ不足ヲ告クル
モ保險會社ノ之ヲ補償スルアリ何ソ刻苦勉勵以
テ農業ニ従事スルヲ要センヤト是ノ如クンハ此
保險法ハ適ニ農民ヲシテ多クハ耕耘ヲ怠ラシム
ルニ至リ深ク農業上ノ害ヲナスモノト謂ハサル
ヲ得ス
然ルニ今此ニ一法アリ以テ保險會社ノ監督ニ代
フヘク且ツ被保險者ヲシテ損害ノ辨償ヲ受クヘ

キ望フルモ尚ホ全カ。盡シテ。勉勵注意セシムルハ
キナリ其法何ソヤ損害ノ減價保。險法及步割辨償
法。是レナリ所謂損害ノ減價保。險法トハ被保險物
ノ全價額ニ對シテ保險ヲナサスシテ其價額ノ幾
分ニ當ル者ヲ以テ保險ノ最高額トシ一定ノ割合
ヲ立テ、損害ヲ辨償スルモノナリ而シテ步割辨
償法ハ之ヲ減價保。險法ニ用ウルノ外若シ其ノ場
合ニ於テハ全額ヲ辨償シ其他ハ幾分ヲ辨償スハ
キノ約定ヲナストキハ亦之ヲ全額保。險法ニモ適
用スルヲ得ヘシ
蓋シ減價保。險(步割辨償)法ハ唯被保險者ヲシテ充
分ニ勉勵注意ヲナサシムルノ効アリト雖モ他ニ

緊要ノ理由アリテ尋常ノ收獲款少ニハ此ヲ用ウ
ル能ハサルナリ後文ニ論スル所ヲ觀ハ自ラ其理
ヲ知ラン

第三十條

減價保。險法及步割辨償法ハ各種ノ保。險ニ於テ最
モ盛ニ行ハル。所ナリ夫ノ生命被保險者ノ如キ
千圓萬圓又ハ二萬圓ノ保。險ヲ受クルモ誰カ此ヲ
以テ其生命ヲ償フニ足ルヘキ金額トナスモノア
ラシヤ又警察ノ保護ヲ保。險上ニ施サ、ル諸國ノ
私立火災保。險會社ニシテ步割辨償ノ原則ヲ用キ
サルモノハ高工又ハ農業衰頹ノ時ニ際スレハ自
燒燬ニ行ハルテ忽チ巨額ノ損失ヲ蒙ルニ至ル

今其實例ヲ舉ケシニ北米國ニ於テ千八百六十二年乃至同六十六年ニ於ル商業不振ノ秋ハ自燒盛ニ行ハレタリ南北戰爭前火災ノ爲ニ被ムリタル損失ハ年々二千二百萬弗ナリシニ千八百六十五年ニハ六千萬弗ニ昇リ同六十六年ニハ一億萬弗ノ巨額ニ達セリ而シテ此五年間ニ於ケル新育府火災ノ度數ヲ統計スレハ千八百三十七回ニシテ其六百七十八回ハ自燒ナリト云フ故ニ自燒ノ度數ハ之ヲ火災ノ總數ニ比較スレハ三分一以上ノ多キニ居レリ(千八百七十一年出版シユミット氏保險論第八十頁)之ニ反シテ公立相互火災保險會社ハ能ク減價保險ノ原則ヲ守リ保險引受ノ際其

家屋ノ價額ヲ見積リテ全價額以下ニ於テ保險スルコトナセリ余ノ起草セシ「日本家屋一般保險論」(千八百七十八年ノ草案)ニ於テモ宜シク分割辨償ノ原則ヲ適用スヘキコトヲ建議セリ(日本家屋一般保險論第十篇ニ見ユ)又家畜保險株式會社ニ在リテモ其保險金額ヲ定ムルノ一點ハ之ヲ家畜相互保險會社ニ比スレハ頗ル疎虞ニシテ其金額ノ高低ニ注意セサルナリ(但シ家畜保險株式會社及家屋保險株式會社ニ於テ家畜及家屋現價額以上ノ保險ヲ受ケタルモノニハ會社ニ對スル總テノ要求權ヲ失ハシムルノ成規ヲ其保險約定書ニ掲ガタルモノナキニ非ズ)之ニ反シテ巴丁國ノ地

方家畜相互保險組合ハ如キハ被保險者ヲシテ家畜ノ取扱方及飼養方ニ戒慎注意セシメシカ爲メ常ニ損害ノ五分一ヲ負擔セシメタリ之ヲ要スルニ日本農民ヨシテ何レノ場合ニ於テモ自ラ先ツ損害ノ幾分ヲ負擔シ保險會社ヨリ全額ノ辨償ヲ受クルヲ望ム能ハサラシメハ怠惰偷安ニ流シテ自己ノ損失ヲ致シ且ツ收穫ノ高ヲ減少シテ日本一般ノ經濟ヲ害スルカ如キ弊害ヲ防遏スルヲ得ヘシ故ニ減價保險法ヲ以テ氣候ニ關スル慢性的天災ニ基ツテ收穫歉少ノ保險ニモ施用スルコトヲサハ亦以テ此弊害ヲ多少防遏スルヲ得ヘキナリ

第三十一條

減價保險法及步割辨償法ニ數種アリ今之ヲ左ニ列記セン

- (イ) 被保險者ヲシテ損害ノ一部分ヲ負擔セシムルモノアリ(即チ巴丁國地方家畜相互保險組合ノ如キハ損害ノ五分一ヲ被保險者ニ負擔セシメ其五分ノ四ヲ賠償ス)
- (ロ) 少額ノ損害ハ被保險者ヨシテ悉皆之ヲ負擔セシメ稍々多額ノ損害ハ若干ノ定限ニ至ルマテハ其半額ヲ負擔セシメ其定限ヲ超エタル損害ハ會社ヨリ之ヲ辨償スルモノアリ(例ヘハ收穫ノ高平均額ノ九割以上

ナルトキハ之ヲ補償ヲナサスハ割以上九割以下ナルトキハ其半額ヲ補償シ而シテ八割以下ナルトキハ其全額ヲ補償スルカ如シ

(ハ) 一定限ノ損害ハ常ニ被保險者ノ負擔トナシ其以上ノ損害ヲ保險會社ヨリ補償スルモノアリ(例ヘハ平均收穫高二割ノ損害ハ農民ノ負擔トナシ其他ノ損害ハ會社ヨリ之ヲ補償スルカ如シ更ニ一例ヲ舉ケテ之ヲ詳ニセシ今假リニ農民ノ收穫高ヲ平年ノ四割五分トセハ其損害ノ高ハ五割五分ナリ其中二割ハ被保險者ヲシテ負擔セ

シメ残り三割五分ヲ會社ヨリ補償スルカ如キ是レナリ)此外尚ホ減價保險法ニ數種アリト雖モ今之ヲ畧ス

然ラハ則チ收穫歉少ノ步割辨償法ハ孰レノ法ヲ最モ可ナリトスルヤ此ニ之ヲ詳説セシテ單ニ一言ヲ陳ヘントス曰ク損害ヲ起ス所ノ災害ニ數種アリ其種類ニ從ヒ種々ノ等級ヲ設ケテ步割辨償ヲナシ又ハ之ヲ爲サ、ルヘキナリ
請フ左ニ一ニノ例ヲ舉ン

家屋保險

(一) 震災ハ家屋所有者ノカヲ以テ防禦スルコト能ハス故ニ震災ハ全額保險トナス

ヘシ

(ロ)

暴風ハ家屋所有者ノ怠慢(戸窓ヲ閉鎖セサル等)ニ因リテ家屋ニ損害ヲ加フルコト多キモノナリ故ニ暴風ニ對シテハ歩割辨償トナスヘシ

(ハ)

火災ハ家屋所有者ノ家屋構造方並ニ火災ノ戒備及防遏ノ方法等ニ因リ其災害ニ大小アリ又時トシテハ所有者自ラ火ヲ失シ爲ニ損害ヲ致スコトアリ故ニ火災ニ對シテハ(ロ)ノ辨償額以下ノ金額ヲ交付スヘシ

(ニ)

戰亂ハ家屋所有者之ヲ好機トシ自ラ故

家畜保險

甲 畜疫

火シテ家屋ヲ焼失スルコトアリ故ニ戰亂ニ對シテハ(ハ)ノ辨償額ニ同シキ辨償額ヲ交付スヘシ此他種々ノ災害ニ對スル辨償法ハ之ヲ畧ス

(イ)

二三ノ畜疫ニ在リテハ全額保險ヲナスヘシ

(ロ)

自餘ノ畜疫ニ在リテハ減價保險ヲナスヘシ

(備考) 幸國ニ於テハ畜疫條例ニ依リ一定ノ畜疫ニ限リテ全額ヲ辨償ス

國庫より支拂スル者ニシテ保險會社より賠償スル者ニ非ス而シテ眞沸病ハ普通價額四分ノ三肺疫ハ五分ノ四但シ此金額ハ同州内ノ家畜所有者ヲシテ分擔セシムヲ補償ス

乙 傳染質ニ非サル畜病

此畜病ハ取扱方飼養方又ハ役使方如何ニ原因スルモノアリ故ニ其步割賠償高ハ甲(イ)(ロ)ノ額ヨリ寡少ナラシムトヲ要ス

收穫保險

- (第一) 急性的天災保險
(第二) 慢性的天災保險

第一 急性的天災保險

(イ) 蟲害及植物病

(い) 避クヘカラサル傳染質蟲害及植物病ニ對シテハ全額保險ヲナスヘシ

(ろ) 防禦シ得ヘキ蟲害及植物病ニ對シテハ其種類ニ依リ等級ヲ設ケテ減價保險ヲナスヘシ

險ヲナスヘシ

(ロ) 地震火山石降下雨灰山崩暴風暴雨降雹

海嘯ノ禍害ハ都テ農民ノ咎ニ因ラズ且ツ抵抗防禦シ得ヘカラサルモノニシテ加フルニ其禍害ヲ豫知スル能ハサルモノナリ故ニ此等ノ災禍ニ對シテハ全額

保險ヲナスヘシ

(ハ)

暴寒ノ害ハ僅ニ植物ヲ衰ミ又ハ之ヲ蓋

フヲ以テ之ヲ防禦スルコトヲ得ヘシ故

ニ歩割辨償ヲナスヘシ

(ニ)

洪水ハ一個人ニ在リテハ堤防ノ修繕ヲ

怠リ又組合員トナリテハ其組合(町村郡

府縣)ニ於テ堤防修理及水理規畫ヲ怠慢

放棄シ以テ禍害ヲ致スコトアリ故ニ洪

水ニ對シテハ(ハ)ト同一ノ歩割辨償ヲナ

スヘシ

此他種々ノ方法アリト雖モ今之ヲ畧ス

第二 慢性的天災保險

(イ)

凶荒ノ原因トナル天災

(備考)余ハ次款(第三十三條)乃至第三十

五條ニ於テ凶歲ニ於ケル收穫歉少ハ

之ヲ保險スヘカヲサル所以ヲ論シ茲

ニハ別ニ歩割辨償ノ例ヲ記セサルヘ

シ

(ロ)

大山荒ノ原因トナル天災

(備考)一種類ノ作物大山作ニシテ毫モ

收穫スル所ナキトキハ別ニ勉勵注意シ

テ且ツ下種ノ季節ヲ過ラサル農民ト

否サルモノトノ區別ナカルヘシト雖

モ幾分ノ收穫(例ハ平均收穫ノ半高)

アルトキハ則チ下種培養法等如何ノ
 効驗著シキモノナリ故ニ大山荒ニ於
 テモ亦步割辨償ノ原則ヲ適用シテ收
 獲ヲ保險スルヲ可トス若シ然ラズシ
 テ大山荒アルニ方リ損害ノ全額ヲ舉
 テ辨償スルコトナセハ無耻ノ農民
 ハ怠惰偷安ニ流レ凶年アルヲ豫知ス
 ルヤ忽チ耕耘ノ業ヲ怠リ故テニ收穫
 ヲ舉ケテ皆無ニ屬セシム以テ會社ニ
 辨償ヲ乞フヲ得策ナリトナスニ至ラ
 ン

(イ)

寒。凍。連。陰。氣。候。不。順。ハ。之。ヲ。防。禦。シ。易。カ。ラ。サ

ル者ナリ故ニ其損害ハ殆ト全額ヲ辨償ス
 ヘシ

(ロ)

雨。濕。ハ。下。水。除。水。器。ヲ。設。ケ。テ。之。ヲ。防。禦。ス。ル

(ハ)

旱。魃。ハ。水。車。ヲ。設。ケ。用。水。ヲ。汲。取。シ。テ。灌。漑。ニ
 供。シ。或。ハ。蘆。藁。類。ヲ。以。テ。作。物。ノ。根
 株。ヲ。蔽。ヒ。テ。其。乾。燥。ヲ。禦。ク。ヲ。得。故。ニ。(ロ)ヨリ
 少額ナル賠償ヲナスヘシ
 此他種々方法アリト雖モ今之ヲ畧ス

第三十二條

保。險。會。社。ニ。於。テ。規。約。ヲ。設。ケ。步。割。辨。償。ノ。程。度。ヲ。定
 ム。ル。ハ。決。シ。テ。難。事。ト。ナ。ス。ニ。足。ラ。ス。何。ト。ナ。レ。ハ。損

害ノ場合及程度ハ其届出報告及損害原因ノ検査ニ由リテ容易ニ之ヲ知ルヲ得ヘケレハナリ而シテ其他ハ會社ニ於テ單ニ計算ノ勞ヲ取ルニ過キサルノミ

第二款

收穫物相場ノ保險法ニ及ホス所ノ影響及ヒ保險法其宜ヲ得サレハ外見上ノ損害ヲ償フニ至ルノ弊

第三十三條

余ハ本論ノ首ニ於テ農民ノ状態ニ關係ヲ有シ且ツ保險法ニ影響ヲ及ホス所ノ種々ノ事項ヲ枚擧シ其中左ノ事項ヲ掲載セリ

第一 收穫物ノ相場

第二 農民ノ自用收穫物ノ高及納稅ノ義務

又本条中ニ於テ左ノ區別ヲナセリ

甲 凶年

乙 大凶年

抑モ收穫物相場(第一)ハ殊ニ凶年(甲)ニ於テ又自用收穫物及納稅義務ハ殊ニ大凶年(乙)ニ於テ保險法ニ影響ヲ及ホスモノナリ

本款ニ於テハ凶年ニ於ケル農民ノ状態ト收穫物相場ト(第一及甲)ノ保險法ニ及ホス所ノ影響ヲ論述シ次款ニ於テハ自用收穫物及納稅義務ノ大凶年ニ方リテ農民ノ状態ニ及ホス所ノ影響ヲ論シ

而シテ一定ノ程限ヲ設ケテ凶荒ヲ保險スルヲ得
ヘキコトヲ論述セシトス

第三十四條

夫レ農民ハ收穫高平均額以下ノ年ニ於テハ必ス
シモ困難ヲ感セスシテ收穫多額ノ年ニ於テ却テ
困難ニ陥ルコト多シトス抑モ日本ニ於テ租税金
納ノ法ヲ施設セシヨリ以來農民ノ困難ニ陥ル所
以ハ獨リ收穫ノ多寡ニ由ルノミナラスシテ又市
場ニ賣買スル收穫物相場ノ高低ニ原因セリ相場
ノ如何ニ由リテハ豊年ノ所得却テ凶年ニ及ハサ
ルコトアリ今一例ヲ舉テ之ヲ説明センニ此ニ一
地主アリ平年ニ於テハ其收穫中ヨリ翌年種子ノ

量ト自家ノ食料ニ充ツヘキ量トヲ差引キ百石ノ
米穀ヲ市場ニ出シ一石ニ付五圓ヲ得而シテ豊年
ニハ百十石若クハ百二十石ヲ賣却シ又凶年ニハ
九十石若クハ八十石ヲ賣却スルモノトセン然ルニ
豊年ニ在テハ農家各多量ノ米穀ヲ市場ニ出スカ
爲ニ其價低落シ凶年ニ在テハ之ニ反スルカ爲ニ
其價騰上スルノ理ナルヲ以テ相場ノ高低所得ノ
多少左ニ掲クル所ノ如キヲ致スモ亦之ナキヲ必
スヘカラザルナリ

第一年ニ一石ニ付金三圓ノ相場ヲ以テ百二十
石ヲ賣却スレハ其金額三百六十圓トナル
第二年ニ一石ニ付金四圓ノ相場ヲ以テ百十石

ヲ賣却スレハ其金額四百四十圓トナル
第三年ニ一石ニ付金五圓ノ相場ヲ以テ百石ヲ
賣却スレハ其金額五百圓トナル
第四年ニ一石ニ付金六圓ノ相場ヲ以テ九十石
ヲ賣却スレハ其金額五百四十圓トナル
第五年ニ一石ニ付金七圓ノ相場ヲ以テ八十石
ヲ賣却スレハ其金額五百六十圓トナル
是ニ由レハ收穫ノ量加々多キトキハ失フ所ノ金
額モ加々多ク之ニ反シテ收穫ノ量加々少キトキ
ハ失フ所ノ金額モ亦加々少キヲ知ルヘシ
農民ノ收穫少額ナルモ市價ノ如何ニ由リテ利益
ヲ得ルエト此ノ如シ然ルニ今其收穫減少シタル

カ爲ニ保險會社ヨリ之カ補償ヲナスコトアラハ
愚モ亦甚シト謂フヘシ夫レ收穫保險法ニ於テ唯
收穫ノ多少ノミヲ視テ更ニ市價ノ高低ヲ問ハス
シハ豈ニ之ヲ愚ト謂ハサルヘケシヤ抑モ農民ハ
市價ノ高低ニ由リテハ豊年ニ於テ保護ヲ要スル
コト却テ凶年ヨリ甚シキコトアルヘシ顧フニ豊
年ニ於テ利益ヲ得凶年ニ於テ損失ヲ被ムルモノ
ハ主トシテ農産物ノ購買者タル市府民其他ノ營
業人ニ在リ然レトモ凶年ニ在テ外國ヨリ廉價ノ
農産物ヲ輸入シ内國ノ需要ニ供スルトキハ則チ
農民其損害ノ全額若クハ幾分ヲ負擔セサルヘカ
テサルニ至ラニ要スルニ農民ニ在テハ收穫石高

保險ヨリモ收穫金高。保險ヲ以テ必要トスル者ナ
リ然レ氏經濟上ノ統計ニ據ルトキハ彼收穫金高
保險ハ決シテ稱賛スヘキノ法ニ非サルヲ知ルヘ
シ

第三十五條

今若シ收穫金高保險法ヲ實施セントセハ何ヲ以
テ其要件トナスヤ且ツ其保險法ハ何等ノ事由ア
リテ之ヲ實際ニ行フ能ハサルヤ
農民其收穫ヲ販賣シテ得タル金額ノ多寡ハ其人
ノ智愚ト時況及投機ノ如何トニ關スル所最モ多
キモノトス是レ余ノ首トシテ注目ヲ望ム所ナリ
農民或ハ能ク時機ヲ知ル者アラン謂ヘラク目下

其供給セントスル產物市場ニ溢レ之ヲ賣ル者多
クシテ買フ者少シ更ニ一二月ヲ俟ツノ利ナル
ニ如カスト然ルモ納租期等ノ如キ金錢支拂ノ期
日ニ迫リテ別ニ現金ナキトキハ其不利ヲ知ルト
雖モ猶ホ之ヲ出賣セサルヲ得サラントス此ノ如
キハ時機ヲ知ルモ之ニ投合スルコト能ハサルナ
リ是ヲ以テ農民ノ所得ハ亦其貧富即チ好時機ヲ
俟ツコトヲ得ルト得サルトニモ關スルモノトス
余今研究ノ爲メ實ニ收穫金高保險會社ナルモノ
アリトシテ之ヲ論センニ此會社ハ目撃シテ各農
民ノ實際ニ出賣シテ得ル所ノ金高幾干ナルヤヲ
知ルコト能ハサルハシ何トナレハ愚者ノ出賣高

ハ智者ノ出賣セル所ト同量ナルモ其所得金高ハ
智者ヨリ寡少ナルコト明ニシテ又生計ニ餘裕ア
ル者ハ其代價ヲ得ルコト彼ノ貧困ニシテ支拂ニ
切迫セル者ヨリ多キヲ常トスレハナリ而シテ無
智ニ因ルノ損失ハ農民之ヲ自擔スヘクシテ他ノ
被保險者ノ之ヲ負擔スヘキモノニ非サルヤ明ケ
シ是ニ由テ之ヲ觀ルニ收獲金高保險會社ハ各個
人ノ出賣價額ヲ以テ等ヲ立ツルコトヲ得ス則チ
農産ヲ取扱フ市場ノ一年間平均相場ニ憑據セサ
ル能ハス故ニ此保險法ニ付テハ左ノ二項ヲ必用
トス

第一 確實ナル相場ノ統計ヲ得ルコト

第二 各産物ノ出賣ノ市場ヲ指定スルコト
然ルニ農産物ハ一年ノ中輸送ノ都合(積雪、河水ノ
増減、航路ノ通塞、道途ノ泥濘等)ニ由リテ處處ノ市
場ニ出賣フルモノ少カラサルカ故ニ其相場ヲ定
ムルニハ各處ノ市場ニ就キテ之シカ率ヲ取ラサ
ルヲ得ス
加之農民一人ニシテ數種ノ産物ヲ出シ其種類ニ
由リテ出賣スル所ノ市場ヲ殊ニスルコトアリ米
市場ハ必シモ麻、藍、雁皮紙又ハ蜜柑等ノ市場ヲ兼
ヌルモノニ非ス且ツ農民ハ果穀ノ熟期ヲ逐フテ
一年間ニ幾種ヲモ耕作スルモノナシハ一人ニシ
テ甚タ多數ナル作物ヲ業トスルコト往往之アリ

故ニ收穫金高保險會社ニ於テ其金高ヲ保險スルニ方リ一其產物ヲ出賣スル市場ヲ視察スルハ蓋シ容易ノ事ニ非サルヘシ

又保險會社ニ於テ農民ノ實際市場ニ出賣シタル高ニ據リテ其年ノ收穫高ヲ判知シ以テ辨償ノ額ヲ算定セントスルハ其實際ニ行ハレサルコト亦農民各個人ノ出賣價額ヲ以テ算ヲ立ントスルニ異ナラス蓋シ農民タルモノ或ハ前年ノ收穫中若干ヲ貯藏シ本年ニ至リテ出賣スル者アリ或ハ本年ノ收穫中若干ヲ貯藏シ翌年ヲ俟テテ出賣セントスルモノアルヲ以テナリ又米價騰貴ノ時ノ如キハ農民平常ノ食用ニ供スル所ノ米穀ヲ節減シ

テ換ユルニ粟類ヲ以テシ其市場ニ出賣スル米穀ノ量額ヲ増加スルモノアルヘシ是レ亦實際出賣ノ高ヲ以テ農民其年ノ收穫高ヲ知ラントスルノ非ナル所以ナリ

又今假ニ收穫金高保險會社アリトセンカ其辨償要求ヲ受クルニ方リ其辨償高ヲ判スルニ頗ル錯雜ナル計算ヲ立テサルヲ得サルヘシ其計算ヲ立ツルニ蓋シ下ノ方法ヲ用ウルナラシ曰ク此耕地ハ平年ニ於テ若干ノ收穫アリ其内種子及自用ニ供スルモノ平均若干ヲ扣除スレハ其殘餘平均若干此レ即チ平年ニ於テ若干價額ニ出賣スルモノナリ然ルニ農民ノ訴フル所ニ依レハ收穫高ハ實ニ平年

ヨリ減シテ若干ナルカ故ニ平年ノ如ク此内ヨリ
種子及ヒ其自用高ヲ扣除セハ出賣ニ充テ得ヘキ
モノ實ニ若干ノ少量ヲ餘スニ過キス然ルニ此穀
物ハ收穫ノ翌年ニ至リ之ヲ出賣スル市場ノ平均
價格若干ナルヲ以テ此殘高ハ若干金タルノ割合
トナルヘシ之ヲ平年ノ賣高ニ比スルニ若干ノ差
ヲ生ス此差額ハ則チ會社カ認メテ損害トナス所
ノモノナリト今此會社カ此ノ如キ損害高ノ計算
ハ農民實際ノ收穫高ニ據リタルモノナレトモ如
何セン實際ノ收穫高ニ據ラントスルニハ其詐偽
ヲ防クコト甚タ難シ但之ヲ防クハ獨リ之ヲ計算
スルノ時期ニ在リテ其時期ハ收穫ノ前若クハ收

獲ノ時ヲ以テ恰好シトスト雖モ此時ニ在リテハ
其收穫ヲ向後十二个月内ニ出賣シテ得ル所ノ平
均額果シテ若干ナルヤ固ヨリ之ヲ豫知スヘカラ
ス而シテ農民モ亦其收穫ヲ出賣シテ金高ヲ得ル
ニ好年ナルヤ將タ惡年ナルヤ未タ知ルヲ得サル
ナリ或ハ上文ニ掲ル如ク收穫少額ナルカ爲ニ市
價騰上シ利ヲ得ル却テ多キヲアリ又ハ收穫多額
ナルカ爲メニ市價低落シテ利ヲ得ル却テ少キコ
トアリ此ノ如ク將來ノ價額得テ知ルヘカラサル
ノ時ニ方リテハ農民豫メ收穫金高ヲ得ルノ惡年
ニ備フル爲メ保險會社ニ倚テ常ニ其安全ヲ保セ
ントヲ欲シ必ス其收穫高ノ評價ヲ受ケンコトヲ
求ムヘシ既ニ收穫高ノ價格ヲ評定スレハ則チ其

詐偽ヲ防クニ足ルヘシト雖モ猶其遽ニ行ハシ難
キ者アリ何ソヤ曰ク農民ノ耕作スル所一種ニ非
サルヲ以テ其一年間ニ收穫スル所ノモノモ亦數
多ナラサルヲ得サルナリ
是ヲ以テ各被保險者ノ實際ニ於ケル收穫高ヲ絶
ヘス確實ニ量定スルハ收穫金高保險法ニ於テ甚
タ必要ノ事件ナルヘシ然レ氏之ヲ行ハントセハ
巨額ノ費用ヲ支辨スルニ非サレハ其効ヲ奏スル
コト能ハサルヤ明カナリ且ツ農民其各種ノ收穫
ニ就テ一々保險會社ノ評定ヲ受クルトキハ自己
モ亦之ニ關與セサルヲ得ス則チ此保險法ハ非常
ノ時日ヲ要シテ大ニ農業ヲ妨クルモノトス
以上掲クル所ハ則チ收穫金高保險ニ於テ實際免

レサルノ困難ナリ其他尚此保險法ニ障礙ヲ爲ス
モノアリ他ニアラス農民ニ在リテ辨償要求ヲ爲
サントスルニハ須ク十二个月ヲ經過シテ平均市
價ノ定マルヲ俟タサル可ラス又保險會社ニ在リ
テモ其要求ヲ待タサレハ辨償ノ高ヲ判定スルヲ
得ヘカラサル是レナリ
要スルニ收穫金高保險ハ此幾多ノ障礙アリ決シ
テ用ウヘキノ法ニ非ス因テ各位モ亦余ニ同シク
之ヲ稱賛セラレサルコトヲ信ス
此他常年ノ收穫石高保險法モ亦前項ト同シク余
ノ取ラサル所ナリ何トナレハ是ノ如キ尋常收穫
歎少ノ年ニ在テハ農産物ノ相場騰貴シ農民爲ニ
利益ヲ得ルノ時ナルニ尚ホ保險會社ヨリ保險金

ヲ交付シテ其利益ヲ増サシムルニ至ルヘキヲ以テナリ今ヤ余ノ尚ホ講究セサルヘカヲサルモノアリ他ニ非ス慢性的天災(旱魃、雨濕、寒冷、氣候不順、連陰)ニ因リテ發生スル非常ノ凶荒ニ對シテ保險法ヲ施スハ經濟上ニ裨益シ得ヘキヲ否ヤノ問題是ナリ

第三款

凶荒ノ年ニ於テ收穫物相場自用收穫物ノ高及納稅義務ノ農民狀態ニ及ホス所ノ影響及凶荒保險ノ程限

第三十六條

凡ソ凶荒ハ其輕重ニ依リ左ノ三等ニ區別セサルヲ得ス即チ

一ニ曰ク大度。大度トハ農民ノ收穫甚々寡少ニシテ翌年ノ種子ハ勿論自用ニ供スルノ食料モ缺乏シ尚ホ且ツ之ヲ購入セサルヲ得サルモノ是ナリ

二ニ曰ク中度。中度トハ農民其收穫スル所ヲ以テ種子及自用ニ供スルヲ得ルト雖モ其地租、地方稅等ヲ支辨スルカ爲ニ出賣スヘキノ餘分ヲ得サルモノ是ナリ

三ニ曰ク小度。小度トハ農民其收穫スル所ヲ以テ種子自用及租稅ニ充ツルヲ得ルト雖モ平年ニ比スレハ收穫量額ノ寡少ナルモノ是ナリ

第三十七條

小度ノ凶荒ニ在リテハ農民其收穫ヲ以テ種子自
用及租税ニ充ツルノ外尚ホ市場ニ販賣スルヲ得
ヘキ餘贏アリテ其額ニ亦多少ノ差アルモノトス
而シテ此時ニ當リテハ農産價額ノ騰貴スルカ爲
ニ其害ヲ感スルコト甚ク少キコトアリ或ハ却テ
利益ヲ得ルノ僥倖ナキニシモ非ス而シテ中度及
大度ニ在リテハ決シテ此ノ如キ僥倖ヲ見ルコト
能ハサルモノナリ是ニ由レハ則チ小度ノ爲ニ保
險法ヲ設クルノ不可ナルコト明クシ其中度及大
度ノ爲ニ之ヲ設クルノ可否ト之ヲ設クルノ方法
如何トハ之ヲ後條ニ論セントス

第三十八條

抑モ中度及大度ノ凶荒ニ際シ農民ノ殊ニ悲境ニ
陥ルモノハ地租ノ負擔ニ堪ヘサルニ在リ余曩ニ千
八百七十九年ニ於テ地租ニ因テ生スル農民ノ困
窮ヲ救済スルニ一定ノ限度ヲ設ケ制法ヲ以テ之
ヲ施行センコトヲ欲シ私ニ大藏省ノ爲ニ地租ノ
輕減及ヒ酒類專賣法ノ施行ニ關スル意見書ヲ作
リ以テ郡區府縣及中央政府ノ全國地租補充資金
法ヲ設ケラレンコトヲ建白シタリ此意見書中ニ
ハ省トシテ地租金納ノ重キカ爲ニ農民ノ困苦ヲ
感スル所以ヲ説述シ且ツ漸次ニ日本農業ノ衰頹
センコトヲ豫言セリ又大藏卿ノ囑命ニ依リ此事
ニ關スル法律案ヲ起草シテ之ヲ具申シタリシカ

即チ今日府縣及政府ニ於テ設ケラレタル備荒法
 ノ基礎トナレリ而シテ此備荒儲蓄金八年々國庫
 ヨリ補助スルモノ百二十萬圓ニシテ各府縣人民
 ヨリ公儲スル所ノモノ亦之ニ同シ因テ其總額年
 ヲ二百四十萬圓ヲ蓄積スルモノニシテ其國庫ヨ
 リスルモノハ二十年ニ至リテ之ヲ止ムルノ制ナ
 リ故ニ其之ヲ止ムル時ニ至リテ之ヲ算スレハ現
 額四千八百萬圓トナルヘシ是レ日本ニ於テハ巴
 ニ凶年ニ於ケル地租ノ困窮ニ備フル一種ノ保險
 會社アリテ存スルモノト謂フヘシ
 然シテ今若シ不幸ノ年ニ遭遇シ此資金ヲ以テ救
 濟ニ供スルモ尚ホ不足ヲ告ルトキハ政府ハ宜シ

ク左ニ掲クル各年ニ於テ凶荒ノ爲メ全國又ハ數
 州ニ行ヒタル舊例ニ倣フテ地租ヲ除免スルノ恩
 惠ヲ施スヘシ即チ

- 元正天皇養老二年 (紀元後七百二十二年)
- 淳仁天皇天平寶字七年 (七百六十三年)
- 稱徳天皇天平神護二年 (七百六十六年)
- 桓武天皇延暦九年 (七百九十年)
- 同 十八年 (七百九十九年)
- 平城天皇大同元年 (八百〇六年)
- 同 三年 (八百〇八年)
- 仁明天皇 自承和二年 (自八百三十五年
- 至同七年) (至八百四十年)
- 文徳天皇仁壽元年 (八百五十一年)

地租ヲ免除スルトキハ他ノ一般ノ租税上納者ヲ
シテ其免除ノ額ヲ補償セシメサルヲ得サルモノ
ナリ蓋シ日本ノ如キ國庫ノ收入金七千萬圓ノ内
地租ニ係ルモノ槩計四千三百萬圓ノ多額ニシテ
其率ハ他種ノ税率ニ比スレハ甚タ重ク且ツ政府
モ既ニ其重キヲ認メ千八百七十三年ニ在リテ地
價百分ノ一二減セシコトヲ公約シタル國ニ於テ
ハ決シテ之ヲ不當ト謂フヘカテサルナリ
要スルニ農民ノ困難ヲ救フハ租税法ヲ釐革シテ
地租ヲ輕減スルニ在リ而シテ非常ノ凶荒ニ際シ
備荒儲蓄金ヲ出スモ猶ホ之ヲ救濟スル能ハサルト
キハ宜シク地租ノ全額若クハ幾分ヲ免除スヘシ

地租ニ因テ生スル困苦ノ爲ニ保險法ヲ施行スル
ハ蓋シ誤レリト謂フヘシ

第三十九條

然ルニ地租ヲ輕減シタリトスルモ彼ノ大度ノ凶
年ニ際スレハ農民尚ホ種子及食料ヲ求ムルニ苦
ムコトアルヘシ
故ニ旱魃、雨濕、氣候不順、寒冷ヨリ發生スル酷虐ノ
凶年ニ於テハ猶ホ急性的天災ニ係ル損害ニ對シ
テ收穫家畜及家屋ノ保險ヨリ辨償ヲ得ルカ如ク
亦タ凶荒保險ノ扶助ヲ要スルモノナリ今凶荒保
險會社ヲ設ケ其辨償義務ヲ制限シテ左ニ列舉ス
ル場合ニ限ルモノトセハ蓋シ多大ノ經費ヲ要セ

スシテ之ヲ施行スヘク且ツ農民ニ大益アリテ經濟上ニ害ナキコトヲ得ヘシ

(第二)

凶荒ノ原因專ラ氣候ノ失度ニ關シ其農民ノ罪ニ非サルコト明瞭ナル時即チ其凶荒全部又ハ全府縣ニ互ル時ニ限り辨償スルコト

(第三)

各農民ノ收穫皆無ナルカ又ハ非常ニ寡少ニシテ例ヘハ米穀ハ平均收穫高ヨリ寡少ナルコト七割其他ノ穀類ハ六割五割又ハ四割等ナル時ニ限り辨償スルコト

(第四)

損害高ノ全額ニ就キテ辨償ヲナサス即

チ損害ノ幾分ヲ辨償シ其他ハ農民ニ負擔セシムルコト

(第四)

農民保險ニ加入スル時ニ於テ定メタル平均相場ニ據リテ辨償シ凶年ノ相場ニ據ラサルコト

故ニ余ハ以上ノ制限若クハ之ニ類スル制限ヲ設ケテ賠償ヲナスヘキ凶荒保險ヲ施行セシコトヲ欲スルナリ

第三章

天災及ヒ農業保險ト農民ノ負債及ヒ金融トノ關係

第一項

農民ノ負債

第四十條

凡ソ農民ノ負債ハ農業保險法ヲ實施シタル國ニ於テハ之ヲ實施セサル國ニ比スレハ特殊ノ事情ヲ有スルモノナリ

未タ保險法ノ設アラサル時ニ在リテハ其農民ノ負債ニ關係アルモノ左ノ如シ

第一 農民負債ノ利子甚タ高キコト是レ農業ハ災害凶荒等ノ爲ニ衰弊スルノ患アリテ貸方ノ危運ヲ増進スルノ恐アルニ由レリ

第二 農民負債ノ返還期限甚タ短カキコト是レ債主ハ負債主現時ノ情態ヲ以テ數年ノ後ヲ料定スルコト能ハサルニ由レリ

第三 農民ノ負債ハ公衆ノ利益ヲ目的トシテ

經理スル所ノ銀行ヨリ出ツルモノ罕ニシテ概ホ朋友親戚隣保又ハ資本家及近傍市府ノ貸金組合等ノ如キ一私人ヨリ出ツルモノ多シ故ニ負債ヲ爲スニ方リテ一時返還ノ約ヲ爲スモノ多ク或ハ稀レニ割賦消還ノ約ヲ爲スモノ其割賦高甚タ多額ナルコト

故ニ今若シ農業保險法ヲ實施シ農民皆其保險ヲ受クルモノトセハ如何ナル事由アリテ負債ヲ爲スモ其利子及返還期限並ニ年賦消還額等ハ必ス寛裕ナル契約ヲ以テスルヲ得ヘシ是ノ如クナレハ則チ農民ヲシテ負擔ニ耐ヘサルノ重債ニ窘迫セラルノ困難ヲ免レシメ殊ニ一

般ノ凶荒ニ際シテハ其困難ヲ減スルモノ甚大ナ
ルヘキナリ
抑モ凶年ニ方リテ負債ヲナスニハ利子及割賦消
還ノ高共ニ平年ヨリ重キヲ常トス故ニ農民ハ此
苛酷ナル契約ニ屈從セサルヲ得サルモノ多シ然
ルトキハ其高利漸次ニ倍乘シ豊年ニ遭フモ己シ
其福ヲ享ルコト能ハスシテ却テ之ヲ高利債主ノ
手裏ニ歸セシムルノ不幸ヲ得ントス且ツ今假令
貸付會社アリテ凶年ニ方リ高利貸ノ刺薄ヲ防制
セントスルモ農業保險法ノ之ヲ幫助スルアルニ
非サレハ到底其功ヲ奏スル能ハサルナリ
以上論述スル所ハ未タ以テ農業保險ト農民負債

トノ關係ヲ列舉シ盡サ、ルナリ今保險法ヲ實施
セハ災禍ニ遭逢シタル後直チニ保險會社ヨリ其
辨償金ヲ交付シテ農民ノ需要ニ應スルカ故ニ方
今農家ニ於テ凶年ニ際シ又ハ災害ニ遭遇シタル
後起ス所ノ負債ノ如キハ多クハ之ヲ起サ、ルニ
至ルヘシ故ニ農業保險法ハ即チ農民負債ノ增加
ヲ防止スルノ最大要具ト謂フヘキナリ
此他尚ホ保險法ヲ實施スルトキハ農家蒙ムル所
ノ災害ヲ未然ニ防遏シ又ハ其虐鋒ノ幾分ヲ挫折
スルコトヲ得ヘシ何トナレハ保險會社ハ土地改
良資金ノ貸付ヲ爲シ而シテ此資金ハ多クハ灌漑
又ハ除水等ノ如キ氣候不順ニ起因スル災害豫防

ノ費用ニ充ツヘキヲ以テナリ
 是ニ由シハ農業保險法ト農家負債トハ其關係ス
 ル所甚々多キヲ知ルヘキナリ

第四十一條

余ハ千八百七十九年ニ於テ地租輕減ニ關シ記述
 セル意見書中今ノ農民ハ漸ク其所有ノ土地ヲ放
 失シテ債家ノ手ニ落チシムルノ憂アルヘキコト
 ヲ豫言セシカ料ヲサリキ此豫言ノ誤ラサルヲ目
 驗スルコト是ノ如ク其レ速ナラントハ哀イッテ
 其始メ一タヒ蹉跌スルヤ速ニ之ヲ挽回スルコト
 能ハス其禍害歳々逐テ増進シ今日ニ及シテハ
 巴ムヲ得ス廣大ナル方法ヲ施シテ之ヲ救治セテ

ルヘカラサルノ勢ヲ見ルニ至レリ余ハ此救治ノ
 必要ヲ感スルニ因リ茲ニ二三ノ報告ヲ掲出シテ
 其事實ヲ證セントス
 加藤森田及久松三氏ハ報知新聞ヲ以テ論説シタ
 ル慘狀原因及振救方按中左ニ掲クル岡山縣ノ統
 計ヲ報告セリ
 此統計ハ書入質公賣處分身代限ノ人員金額年々
 増加スルノ狀ヲ示シテ明カナルモノナリ

年度	土地家屋抵當		公賣處分		身代限	
	金額	人員	金額	人員	金額	人員
千八百七十九年	八八八・三三〇	六三・五七七	一〇・五	九	五・六九九	五二
千八百八十年	四・二・三九四	七八〇・二三	二・五九	二四	二・九一六	五四

千八百八十一年	五、三二、一六四	八、六四七。	一、七九八	四。	五、一三二	八四
千八百八十二年	六、九七、二七一	一、〇七、五七四	七、四八一	一、〇六	二、二、三四二	一九九
千八百八十三年	七、〇七、二二〇	一、三七、〇〇八	二、一、四一四	五二。	五、八八一	四九三

明治十四年(千八百八十一年)ニ於ケル日本全國ノ
 抵當負債ニ係ル公報ニ據レハ其金額一億四千百
 萬圓ナリト云フ

千八百八十三年四月新聞ノ報スル所ニ據レハ靜
 岡縣ノミニテ書入質ニ係ル土地ノ價額千五百萬
 圓ナリト云フ

此二ヶ年半内ニ於ケル農民ノ困弊ニ關シテ著明
 ナル記事二三ヲ更ニ茲ニ掲記スルハ無益ノコト
 ニアラサルヘシ但廣大ナル方法ヲ設ケ必要ナル

會社ノ組織ヲ編成シ及農民ノ困難ヲ芟除スルノ
 決意ヲ取ルニハ上文ニ掲クル所ノ統計ノ大數ヲ
 知ラハ則チ足レリ
 千八百八十三年十一月須賀川○租稅不納ノ爲ニ
 拘留セラレタル農民百四十七名アリ(自由新聞)
 千八百八十三年信州○南佐久郡田口村ノ農民ハ
 半數以上負債辨償ノ爲ニ土地及家屋ヲ賣却シ其
 代金ハ實價ノ三分一ニ下レリ(毎日新聞)
 千八百八十四年五月山梨縣○各村納租スルコト
 能ハサル農民無數ニシテ大隅村(戸數四百戸)ノ如
 キハ二三戸ヲ除クノ外村民皆ナ身代限ノ處分ヲ
 受ケリ關村負債高十七萬圓ニシテ田畑ノ書入質

ニ係ルモノ五萬圓ナリト(時事新報)

千八百八十四年神奈川縣。○相模國陶綾郡一色村ノ農民十一名失意ノ餘高利貸人宇三郎及其長男ヲ大磯ニ殺害シ直チニ警察署ニ自首セリ其黨與二百名乃至三百名モアルヘシ(毎日新聞)

千八百八十四年九月伊豆。○一千名許ノ借金黨ト貸金社トノ間ニ久シク紛擾ヲ起シテ解ケザリシカ今後ノ貸金ハ總テ年一割三分ノ利子ト爲スヘキノ契約ヲ以テ調和セリ而シテ當時現在ノ負債ハ之ヲ二種ニ分チ其一ハ銷還期限五年ヲ延ハシテ之ニ年八分ノ利子ヲ附スルコト、ナシ其二ハ銷還期限三年ヲ延ハシ之ニ年一割ノ利子ヲ附ス

ルコト、ナセリ(自由新聞)

千八百八十四年十一月埼玉縣。○秩夫ニ一揆起リ群馬及長野ニ蔓延シ暫時ニシテ鎮靜ニ歸シタルモ之カ爲ニ負債者小作人等ノ内ニ利子ノ低減ト小作料ノ輕減トヲ要請スル一黨與ヲ爲セリ而シテ千八百八十五年二月其一揆ニ黨シテ罰セラレシ者二千六百四十四名其罰金ノ額四千四百六十五圓ナリキ

千八百八十四年十一月播磨。○加古郡ノ農民九百名以上身代限ノ處分ヲ受ケ其財產ハ初期即チ八月期ノ地租上納ノ爲ニ公賣ニ附シタリ
千八百八十四年十一月河内。○澁川及茨田郡ノ人

民窮困ニ苦ミ不穩ノ虞アリ(時事新報)

千八百八十四年十一月伊豆。田方郡ノ農民小作料ノ支拂方ヲ拒ミ十分ノ三ニ減少センコトヲ逼レリ(毎日新聞)

千八百八十五年一月伊豆。借金黨再ヒ不穩其百五十名ハ裁判上審問ニ遣ヘリ

千八百八十五年二月伊豆。四十四ヶ村トオクリ銀行及貸金會社トノ間ニ紛争アリ窮民大凡二千名徒黨シテ談銀行ヲ襲ヒ貸借ノ約束ヲ變更セ

ントテ進發セシカ東海道三島ニ於テ巡查ノ爲ニ逐拂ハレタリ

千八百八十五年加賀。大聖寺ノ窮民八百名官署

ニ對シ永ク窘迫シテ凍餓センヨリハ寧ロ囚獄ニ

就ンコトヲ請願ナリ(朝野新聞)

千八百八十五年三重縣。農民ノ窮困スルハ掩テ可ラサルノ事實ニシテ度會郡ニ於テハ人民未タ

第四期ノ地租三分一ヲモ納メスニテ租期ヲ過ク

ルコト已ニ十四日ニ及ヘリ(報知新聞)

千八百八十五年五月兵庫縣。天田郡ノ人民三千名困窮ノ餘福地山ニ蕪集ニテ政府ニ歎願センコトヲ決議セリ(時事新報)

右ニ列記セル數件中ニモ伊豆ノ借金黨ノ如キ今後ノ負債ニ對シ年利一割三分ヲ支拂フヘキ恩惠(猶ホ非常ノ高利トスハシ)ヲ受ケ次テ銷還期三介

年及五ヶ年ヲ延スノ恩惠ヲ受ケタルハ特ニ知リ得テ緊要ナルモノニシテ乃チ農業上ニ於テハ負債ノ期限永クシテ利子ノ割合低キヲ要スルノ實例ヲ明示スルモノト謂フヘシ

第二項 農民及金融

第四十二條

國ノ體內ニ金錢ノ循環スルハ恰モ人ノ體內ニ血液ノ循環スルカ如シ諸部ノ生育發達及活動ヲ均一ナラシムルニハ亦其循環ヲ均一ナラシメサル可ラズ然ルニ苦シ血液ヲ頭腦ニ聚メ金錢ヲ首府ニ聚ムル片ハ或ハ爲ニ炊衝ヲ起シ投機ノ熱病ヲ來シ又ハ眩暈悶絶ヲ醸シ之ニ反シテ血液空乏ノ

部分ニ在リテハ又一種ノ疾病ヲ起スノ憂アルモノナリ今日本金融ノ組織モ亦之ニ同シク甚々其宜ヲ得サルモノニシテ全國金錢ノ歲ヲ逐ヒテ漸ク首府ニ聚合スルノ狀ハ府民ノ所有スル公債證書ノ漸次ニ其額ヲ増加スルヲ以テモ亦之ヲ知ルヘシ地方ノ金錢其乏ヲ告クルカ爲ニ物産ノ價格漸ク低落シ貸借ノ途漸ク塞リ益納租ノ現金ヲ得ルニ困苦セリ彼ノ備荒儲蓄法第五條第二項ニ依レハ地方人民ヨリ儲積スル備荒儲蓄金ノ如キモ此現金ニ交換スヘキ確實ナル有價證券ナキカ爲ニ少クモ其半額ヲ公債證書ニ換ヘテ之ヲ貯藏シ又驛遞貯金預所ニ委托スル所ノ各人貯金モ亦地

方ヨリ聚リテ首府ニ來リ終ニ大藏省ノ金庫ニ入
レリ此ヲ以テ備荒儲蓄及貯金ノ如キ最モ農民ノ
疲弊ヲ救治スルニ實効アルヘキ良法モ却テ其疲
弊ヲ増進スルノ媒ヲナセリ

今農業保險ノ法ヲ設クルニ方リテモ亦其資金ト
シテ先ツ地方ヨリ巨多ノ金額ヲ聚合セサルヲ得
ス而シテ此聚合シタル金額ハ特ニ大凶年アリテ
之ヲ散布スルニ非サレハ再々地方ニ還ヘラサル
モノトス故ニ此新法ヲ立ツルニハ安全ノ方法ヲ
設ケテ其資金ヲ地方ニ置クノ舉ニ出シトテ望
ム若シ此資金ヲ以テ亦之ヲ公債證書ニ換フルノ
前轍ニ依ラシメハ獨リ農業保險ノ實効ヲ失フノ

ミナラス又且ツ損害ヲ蒙スノ弊ヲ見ントス今假
令此ノ如キ方法ヲ行フテ公債證書ノ騰貴スルコ
トアリトスルモ未々以テ日本利子ノ低落シタル
ヲ證スルニ足ラス上文ニ述ヘシカ如ク農民負債
ノ利子ヲ以テ一割三分トナシタルモ負債者ノ強
迫調和ニ由リテ始メテ此ニ至リタルニ非スヤ故
ニ此ノ如キ一種ノ金券ニ限リ其利子ノ低落スル
モ日本經濟上ニ於テハ唯其一小部分ノ利益タル
ニ過キサルノミ
是ヲ以テ之ヲ觀レハ農民ノ疲弊ヲ救治スルハ獨
リ保險法ノ設ノミヲ以テ足レリトセス宜シク更
ニ金融ヲ圓滑ナラシムルノ方法ヲ立テ安全確實

ナル金融社ヲ各地方ニ設ケ以テ一地方ノ金錢ヲ
シテ常ニ外出セシメサランコトヲ要スヘシ

第四章 保險法ノ缺ヲ補フ事

第四十三條

余ハ前ニ保險上ニ影響スル諸般ノ狀況ヲ開説シ
農業上ニ於テ遭逢スル數多ノ災害中其保險スヘ
キモノハ唯急性的天災ト大凶荒トニ限り其他ノ
災害ハ保險法ヲ以テ補償ス可ラサルコトヲ明ニ
セリ又收穫金高保險及收穫石高保險ノ共ニ良法
ニ非サルコトモ亦之ヲ明ニシタリ要スルニ農業
上ノ保護法タル保險法ハ尚ホ缺點アルヲ免カシ
ス此レニ由リテ以テ農民ノ困厄ニ陥ルヲ救援セ

ントスルハ到底能ハサルコトナルヲ知レリ
然ラハ則チ農夫ヲシテ凶歳ニ方リ損害ヲ被ムル
コトナカラシムルニハ保險法ノ外復タ何ノ方法
カアル曰ク天自テ其法ヲ明示セリ蓋シ豊饒連
年ノ後ハ父ス中年及凶年ノ相尋テ臻リ交互ニ
往來スルコト已ニ上文ニ述フル所ノ如シ瑞典
國ニ於テハ千七百五十年ヨリ千八百五十年ニ
至ルノ間凶荒ノ相踵テ起ルコト二十九ヶ年中
作四十八ヶ年豊作二十四年ニ及ビタルコトアリ
故ニ其農民ハ七ヶ年間ノ中作及豊作ニ方リテ貯
蓄ニカメ以テ毎三ヶ年間ノ凶荒ニ備アルコトヲ
得タリ今假リニ瑞典ノ農民ヲシテ收穫寡少ナル

年ニ於テハ其收入金ヲ得ルニ饒多ニシテ收穫饒
多ナル年ニ於テハ其收入金ヲ得ルニ寡少ナリト
スルモ其比例ニ於テハ大差ナキニ近カラシ然ル
トキハ則チ農民ハ收穫金ヲ得ルノ好年及中年々
ル七ヶ年半ニ貯蓄シテ以テ收穫金ヲ得ルノ惡年
タル二ヶ年半ノ豫備ニ供スルヲ得ヘキナリ日本
ニ於テモ亦農民ノ貯蓄ニ得ヘキ豊年及中年ノ數
ハ少クモ其貯蓄ヲ使用スヘキ凶年ノ數ニ二倍乃
至三倍スルヤ疑ナカルヘシ
故ニ農夫ハ豫メ豊年ニ節儉シテ以テ凶歳ニ備ヘ
サルヘカラス是モ亦一ノ保險法ナリ夫レ保險法
ニ於テモ亦被保險者ノ節儉蓄積ヲ怠ルヘカラサ

ルト損害ヲ他人ニ分擔セシムルトノ二法ヲ以テ
彼此輕重ナク兩立並行スルモノ多シ例ヘハ生命
保險法ノ如キ保險ト節儉トノ主義常ニ相離レス
シテ被保險者死亡シタルトキハ其遺族ニ交附ス
ヘキ保險金額ハ被保險者ノ生前ニ於テ蓄積シタ
ル金額ヲ以テ之ニ充ルモノナリ但被保險者若シ
平均年齢以下ニシテ夭折シ未タ必要ノ保險金額
ヲ蓄積スルニ至ラサルトキハ他ノ被保險者ニシ
テ平均年齢以上ニ生存シタル者ノ蓄積金ヲ以テ
死者ノ遺族ニ交付シ長壽ノ幸福ヲ得タル者ヲシ
テ夭折者ノ損害ヲ分擔セシムルモノトス之ヲ要
スルニ保險ヲ受クルハ即チ節儉法ノ一種ナリ蓋

シ節儉蓄積ハ自ラ其身ヲ保險スルモノニシテ亦
一種ノ保險法ト謂フヘシ而シテ節儉ト保險トハ
兩者相須チテ其効ヲ成スモノナリ
農民若シ金銀貨又ハ有價證券ヲ貯蓄シテ苟クモ
之ヲ土地ノ購求家屋ノ新築衣服ノ調製等ニ消費
スルコトナクハ遠ニ現金ヲ得ンカ爲ニ其產物
ヲ擲賣スルノ切迫ニ至ラサルヘシ果シテ然ラハ
毎年餘裕ヲ得テ困弊流離ノ禍ヲ免カレ少ナクモ
高利ノ負債ヲ起シテ爲ニ窘窮ヲ益スノ難ニ罹ラ
サルヲ得ヘシ抑節儉ノ此ノ如キ大益タル所以ハ
農民ヲ獎勵勸諭シテ以テ之ヲ悟ラシムヘシト雖
モ獎勵勸諭ハ未タ以テ充分ノ効ヲ見ル能ハサラ

ン充分ノ効ヲ見ント欲セハ宜シク預入レニ容易
ニシテ且ツ確實ナル貯金預所ヲ設ケ而シテ農民
ヲシテ定期(每週毎月)貯金ヲ爲スノ慣習ヲ成サシ
ムヘシ然レトモ此貯金預所モ亦金錢ヲ地方ヨリ
聚集スルノ弊ナカランコトヲ要ス
夫レ貯蓄金及ヒ保險金ハ宜シク之ヲ一處ニ堆積
セシテ再ヒ民間ニ融通シ以テ農業上ノ資金ニ
充用セシムヘシ而シテ農業上ノ抵當貸金ハ長期
月賦ニシテ其利子ノ低賤ヲ要スルモノナリ是レ
余カ第二編ノ方案ヲ畫スル所以ナリ

第四十四條

然ルニ今茲ニ論者アリ曰ク現今既ニ備荒儲蓄法

アリ何ソ復々收穫保險法及貯金法ヲ設クルノ要
アラシヤト余今將ニ論シテ第二編ニ到ラントス
然レ氏猶ホ此ニ一言シテ以テ論者ノ説ヲ擊破セサ
ル可ラス蓋シ現行ノ備荒貯蓄法ノ主旨タル農民
ヲシテ農業ニ従事スルノカヲ保タシメントスル
ニ在リ故ニ明治十三年六月十五日發布ノ太政官
第三十一號布告第一條ニ曰備荒儲蓄金ハ非常ノ
凶荒不慮ノ災害ニ罹リタル窮民ニ食料小屋掛料
農具料種穀料ヲ給シ又タ罹災ノ爲メ地租就中國
稅ヲ納ムルヲ能ハサル者ヲ補助シ又ハ之ニ貸與
スルモノトスト
是ニ由レハ備荒儲蓄金ハ罹災ノ爲ニ要スルモノ

ニシテ損失ヲ保險スルノ性質ヲ有セサルナリ故
ニ此儲蓄金ハ農民ノ極メテ困窮ナル者ト貧窶之
ニ次ク者トヲ利スルヲ主トシ稍ヤ財產アル者ハ
困窮貧窶ノ境界ニ陥リタル後ニ非サレハ其利ヲ
享クルコト能ハサルモノトス然ルニ保險法及貯
金法ノ目的タル農民ノ困窮貧窶ニ陥ラントスル
ヲ防禦シテ此域ニ至ラシメサルノ計畫ニ出ツル
モノナリ故ニ備荒儲蓄法ノミニテ未タ充分トナ
ス可ラス是レ前文ニ掲ケタル農民ノ困難(第四十
一條)ニ因テモ亦之ヲ知ルヘキナリ



